

宮城県仙台市

郡山遺跡XVI

——平成7年度発掘調査概報——



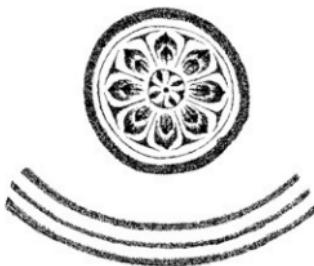
1996. 3

仙台市教育委員会

宮城県仙台市

郡山遺跡XVI

——平成7年度発掘調査概報——



1996. 3

仙台市教育委員会

序 文

郡山遺跡の範囲確認調査も本年度は16年目を迎え、毎年数々の成果を積みあげ、東北の古代史解明に一石を投じております。このことは古代史・考古学等の識者のみならず、市民の皆様方にも御承知のことと存じます。

幻の城柵としての一端をあらわした昭和54年以来、継続的に実施してまいりました発掘調査により古代の文献に記録のない“幻の城柵”はまさに“甦る城柵”として、私たちの前にその姿を現したのです。辺境とされてきた当地方の歴史観を一変した我が国最古の地方官衙跡・郡山遺跡の発見は日本の考古学・古代史学界に大きな反響を巻き起こしたものと確信しております。

本年度はII期官衙の中権部の様相を明らかにすることを目的に発掘調査を実施いたしました。その結果、中権施設のものと考えられる石組溝跡や建物跡などが発見され、II期官衙中権の様相や変遷のみならず、I期官衙の実態も次第に明らかになってまいりました。ここに調査の記録を余すところなく報告、公開するものであります。

市街化への動きが著しい郡山地区にあって、文化財の保存につきましてもより一層緊密な調整を必要とする状況にあります。そのような中にあって、継続的な調査を実施できることは、ひとえに土地所有者の方々、地元町内会の皆様方の多くのご協力と御支援の賜物と感謝申し上げる次第であります。

先人の残した貴重な文化遺産をつぎの世代に継承していくことは、行政によってのみ成し得るものではなく、市民一人一人の先人への深い理解と子孫への広い展望なくしては成し得ないものであります。

これからも文化財保護への深いご理解と御協力をお願いするとともに、本書が文化財愛護精神高揚の一助となりますことを願ってやみません。

平成8年3月

仙台市教育委員会

教育長 坪山繁

例 言

1. 本書は郡山遺跡の平成7年度範囲確認調査の概報である。
2. 本調査は国庫補助事業である。
3. 本概報は調査の速報を目的とし、作成にあたり次のとおり分担した。

本文執筆 熊谷裕行 III、V、VI-1

長島榮一 I、II、IV、VI-2

豊村幸宏 調査成果の普及と関連活動

遺構トレース 菅井百合子、岡まり子、小佐野直子

遺物実測 豊村、熊谷、菅家婦美子、吉田りつ子、伊勢多賀子、佐藤栄子

遺物トレース 菅井、伊勢、佐藤、岡、小佐野、鈴木由美

遺構写真撮影 長島、熊谷、豊村

遺物写真撮影 長島

遺物補修復元 赤井沢千代子、日比野園子、岡、菅井、吉田

図版作成 長島、熊谷、豊村、菅井、菅家、吉田、伊勢、佐藤、岡

写真図版作成 豊村

編集は熊谷・長島・豊村がこれにあたった。

4. 遺構図の平面位置図は相対座標で、座標原点は任意に設置したNo1原点（X=0、Y=0）とし、高さは標高値で記した。
5. 文中で記した方位角は真北線を基準としている。
6. 遺構略号は次のとおりで、全遺構に通し番号を付した。

S A 柱列などの踞跡 S I 竪穴住居跡・竪穴遺構 P ピット・小柱穴

S B 建物跡 SK 土坑

S D 溝跡 SX その他の遺構

7. 遺物略号は次のとおりで、各々種別毎に番号を付した。

C 土師器（ロクロ不使用） F 丸瓦・軒丸瓦 K 石製品

D 土師器（ロクロ使用） G 平瓦・軒平瓦 N 金属製品

E 須恵器 I 陶器 P 土製品

8. 建物跡模式図中の記号は以下の基準により図示した。

●=柱痕跡の検出されたもの

○=振り方のみ検出されたもの

○=他遺構との重複により検出されないもの

●=調査区外にあり検出されないもの

9. 遺物実測図の網スクリーントーン張り込みは黒色処理を示している。

10. 本概報の土色については「新版標準土色帳」（古山・佐藤：1970）を使用した。

目 次

序 文	
例 言	
I はじめに	1
II 調査計画と実績	2
III 第107次発掘調査	4
1. 調査経過	4
2. 発見遺構・出土遺物	5
3. まとめ	30
IV 第108次発掘調査	36
1. 調査経過	36
2. 発見遺構・出土遺物	36
3. まとめ	36
V 第109次発掘調査	38
1. 調査経過	38
2. 発見遺構・出土遺物	38
3. まとめ	40
VI 総括	41
調査成果の普及と関連活動	49
写真図版	

I はじめに

平成7年度は郡山遺跡範囲確認調査第4次5カ年計画の1年次にあたり、下記の体制で臨んだ。

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会文化財課

文化財課 課長 小井川和夫

管理係 係長 千葉晴洋

主査 村上道子

主事 福井健司

主事 斎藤英治

調査第一係 係長 田中則和

主査 木村浩二

主事 長島榮一

教諭 熊谷裕行

調査第二係 係長 結城慎一

主査 緒原信彦

教諭 豊村幸宏

発掘調査、整理を適正に実施するため調査指導委員会を設置し、委員を委嘱した。

委員長 佐藤 巧（東北大大学工学部名譽教授 建築史）

副委員長 工藤雅樹（福島大学行政社会学部教授 考古学）

岡田茂弘（国立歴史民俗博物館教授 考古学）

須藤 隆（東北大大学文学部教授 考古学）

進藤秋輝（宮城県多賀城跡調査研究所長 考古学）

今泉隆雄（東北大大学文学部教授 歴史学）

発掘調査および遺物整理にあたり、次の方々から御協力をいただいた。

地 権 者 斎藤助治、庄子孝、赤井沢久治

調査参加者 赤井沢サダ子、赤井沢千代子、安齊貞子、伊勢多賀子、伊勢みつ、伊藤貞子、大友節子、圓まり子、尾形陽子、小佐野直子、小嶋登喜子、神坂勝太郎、菅家婦美子、小池房子、佐々木直子、佐藤栄子、菅井百合子、鈴木由美、高橋ヨシ子、千田あや子、日比野園子、牧かね子、吉田りつ子

さらに下記の諸機関の方々から適切な御教示をいただいた。

文化庁記念物課：主任埋蔵文化財調査官 囗村道雄、宮城県教育庁文化財保護課：課長 千葉景一、技術補佐 白鳥良一、文化財専門監 桑原滋郎、調査第二係長 真山悟、佐藤則之、宮城県多賀城跡調査研究所 研究第1科長 丹羽茂、柳澤和明、多賀城市埋蔵文化財調査センター 千葉孝弥

II 調査計画と実績

平成7年度の発掘調査は、郡山遺跡発掘調査の第4次5カ年計画における第1年次目である。第4次5カ年計画ではII期官衙の実態を明らかにすることを目的とし、とくに今年度は政庁西辺部の様相を明らかにするために調査を実施した。また今年度と来年度に限り、国庫補助事業である郡山遺跡緊急範囲確認調査の他に、同じく国庫補助事業の遺跡発掘事前総合調査を加えて発掘調査をしている。発掘調査費については次のような内示をうけた（総経費2,200万円、国庫補助金額1,100万円、県費補助金額550万円）ことから、以下の実施計画を立案した。

表1 発掘調査計画表

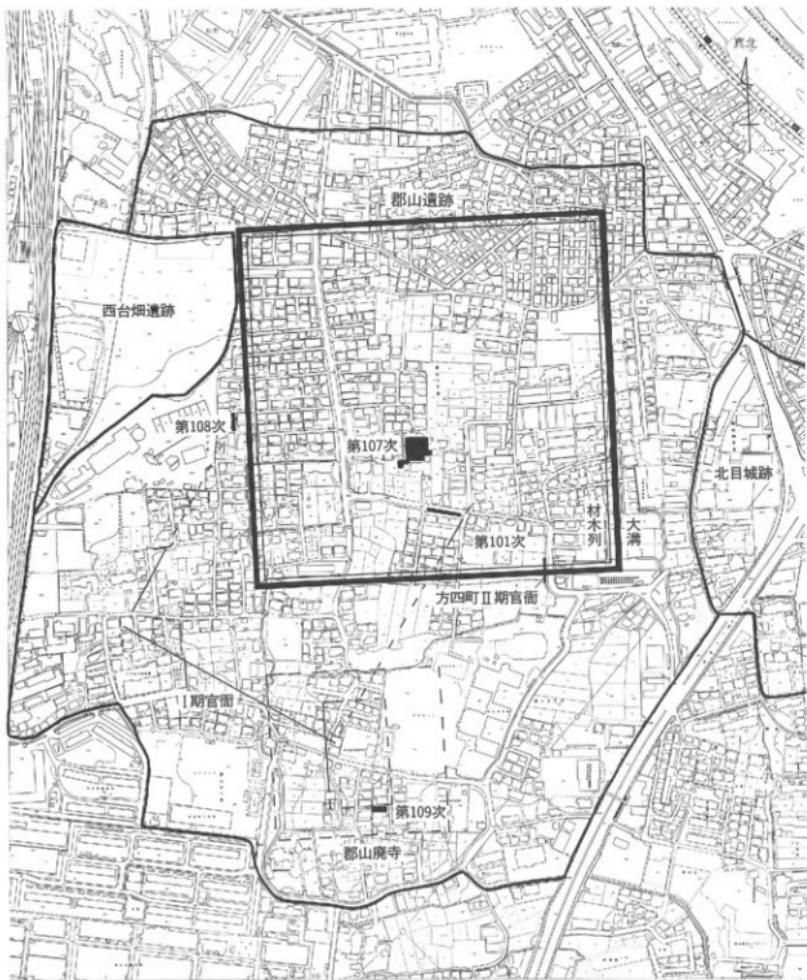
調査次数	調査地区	調査予定期間	調査予定期間
第107次	II期官衙中央地区	1,200m ²	6月～10月
計	1地区	1,200m ²	6月～10月

またこの他に開拓遺跡の構造確認調査として、「仙台平野の遺跡群」で燕沢遺跡の調査も併せて立案した。事業開始にあたり郡山遺跡内での市道拡幅工事に伴う第101次調査、共同住宅に伴う第108次、第109次調査も実施したが第101次調査は平成6年度からの継続調査であり、今後も市道の同一路線内での工事が実施されるため、事前の調査が全て終了したのちに国庫補助事業と別にまとめて報告する。また第108次、第109次調査については仙台平野の遺跡群で対応しているが、郡山遺跡内での調査のため本概報に記載することとし、「仙台平野の遺跡群XV」では概要のみを掲載する。

第107次調査では、II期官衙の中軸部である政庁の西辺を区画する石組溝跡やその内部に配置された掘立柱建物跡が発見された。I期官衙では板塀に掘立柱建物跡が密接して発見され、これまでの他地区の調査成果とあわせて板塀で区画された重要なブロックが想定された。第108次調査ではI期官衙の西辺が検出される位置であったが、搅乱が著しく想定した遺構を検出することができなかった。第109次調査では竪穴住居跡の一部が発見された。本年度はこれら3地区的調査報告を以下に報告する。

表2 発掘調査実績表

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第107次	II期官衙中央地区	820m ²	6月19日～11月16日
第108次	I期官衙西地区	40m ²	8月1日～8月4日
第109次	郡山庵寺南地区	32m ²	11月27日～12月4日
計	3地区	892m ²	6月19日～12月4日



第1図 郡山遺跡全体図

III 第107次発掘調査

1. 調査経過

第107次調査区は方四町II期官衙の中央部、推定政府域の西辺付近に位置している。周辺で行われた調査には、昭和59年度の第44次調査、60年度の第51次・55次調査、また平成6年度の第102次調査などがあり成果が上げられている。これらの調査成果をもとに、これまで政府西辺の区画施設は、第55次調査で検出されたSA730一本柱列であると考えていた。この一本柱列は第44次調査区までは延びていないことから、第55次調査区と第44次調査区の間で東に展開するものと想定していた。しかし昨年度の第102次調査区では、政府南辺となる区画施設は発見されなかったことから、政府の区画施設について再検討する必要が生じた。

II期官衙推定政府域内において、現時点では発掘調査を実施できる地点が極めて少なく、本調査区はSA730一本柱列の通過を確認できる唯一の地点となっている。

現況は標高10.3～10.4m程の畠地である。調査区外に排土場を確保することが困難であったため、北半部と南半部とに分けて調査を実施することとした。北半部は6月19日から表土排除を行った。表土の厚さは0.4～0.6m程である。その後遺構の検出作業に入ったが、畠の耕作による天地返しを深く受け、遺構が著しく削平されていた。南半部の調査が進行し、遺構の概要がほぼ明らかとなった9月15日に現地説明会を実施し、調査成果を公表した。南半部の調査を終了し実測図作成後、埋め戻し及び北半部の表土排除を行った。北半部も部分的に天地返しを受けており、遺構の残存状況は良好ではなかった。天地返しを除去し北半部の遺構の状況が把握されたのは10月中旬である。その後、これまでの調査成果を検討しながら各遺構の調査を進めた。北半部の調査を終了し、埋め戻し及び整地作業など全ての作業が終了したのは11月16日である。



第2図 第107次調査区位置図

2. 発見遺構・出土遺物

今回の調査で発見された遺構は、一本柱列 1 列、柱列 1 列、板塀跡 1 条、掘立柱建物跡 15 棟、溝跡 17 条、土坑 22 基以上、性格不明遺構 1 基などの他、小柱穴・ピットなどである。これらの遺構は耕作土（第 I a 層～I j 層）直下の草本層位第 II 層上面で検出されている。

SA1615 一本柱列跡 調査区の北半に、E-31°-S 方向に延びる一本柱列を検出した。北西から 3 間南東に延び、梁行 2 間×桁行 5 間の SB1625 建物跡の N 3 W 1 柱穴に接続している。さらに建物跡の N 3 W 6 柱穴から 3 間分を検出し、調査区外に延びている。検出した総長は、13.2m である。柱穴は 66～72×80～92cm の隅丸方形で、柱痕跡は 14～23cm である。柱間寸法は 186～206cm である。柱穴の埋土は、褐色シルト質粘土、にぶい黄褐色粘土及びシルト、にぶい黄橙色シルトなどである。遺物は出土しなかった。

SA1620 板塀跡、SB1610・1560・1555 掘立柱建物跡、
SD1593 溝跡に切られている。

SA1620 板塀跡 調査区の北半に、E-31°-S 方向に延びる板塀跡を検出した。上幅 44～61cm、底面幅 32～40cm、深さ 41～50cm の布掘り状の溝のなかに、幅（厚さ）5.4～6cm、長さ 14～20cm の板材の痕跡が並んで検出された。掘り方の断面は U 字形で、埋土は明黄色シルト、黄褐色シルト、灰黄褐色粘土質シルト、にぶい黄褐色粘土質シルトなどである。板材の痕跡は、掘り方中央よりやや北に寄って検出されている。板材の痕跡の間には、直径 14～16cm の支柱の痕跡が検出された箇所もある。支柱と考えられる痕跡の柱間寸法は 224cm である。板塀跡は、SB1610 掘立柱建物跡の N 3 W 1 柱穴と SB1645 門跡に接続し、両建物間の 11.2m 程を結んで延びている。板塀跡の掘り方は、建物跡の N 3 W 1 柱穴掘り方を切っているが、これは構築手順の違いと考えられる。遺物は出土しなかった。

SA1615 一本柱列、SB1625 掘立柱建物跡を切り、SD1593・1569C・D・E 溝跡、SK1602 土坑に切られている。

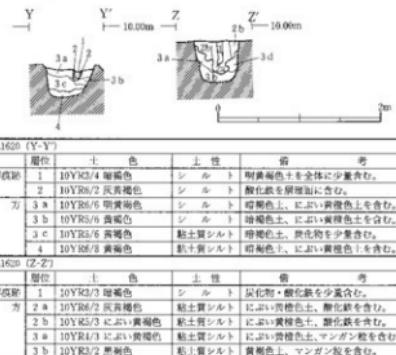
SB1645 門跡 板塀の北西端部では、小規模な門跡が検出されている。掘り方が 40～60×80～112cm の隅丸方形の抜き取りを伴った柱穴の中に、直径 17～19cm の柱痕跡が検出された。両柱痕跡の柱間寸法は 168cm で、空閑地となっている。門跡の両柱穴では、建物跡との接続部分同様、門跡柱穴掘り方を板塀の布掘り状の掘り方が切っており、さらに北西に板塀が延びている。

門跡の東側柱穴抜き取り穴より、土師器窯体部片が 1 点出土したのみである。

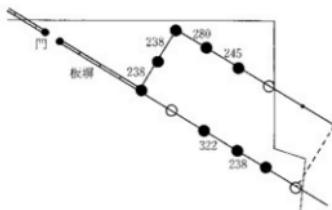
SB1610 掘立柱建物跡 梁行 2 間（総長 4.76m、柱間寸法 238 cm）、桁行 5 間かそれ以上（総長 14.0m、柱間寸法 238～322cm）の東西棟の建物跡で、方向は北桁行で E-31°-S である。柱穴は、110～133cm×109～142cm の隅丸方形である。柱痕跡は 20～32cm である。埋土は、にぶい黄褐色シルト、にぶい黄橙色粘土質シルト、灰黄褐色粘土などである。N 3 W 1 柱穴で SA1620 板塀跡と接続している。

遺物は、N 3 W 1 柱穴より土師器窯体部片が 2 点出土した。

SA1615 一本柱列、SB1625 掘立柱建物跡を切り、SB1555・1560



第3図 S 1620板塀跡断面図



第4図 S 1610模式図

掘立柱建物跡、SD1569A・B・1593・1601・1604・1607溝跡、SK1602土坑に切られている。

SB1625 掘立柱建物跡 梁行2間(総長3.84m、柱間寸法192~205cm)、桁行5間(総長11.6m、柱間寸法193~258cm)の東西棟の建物跡で、方向は北桁行でE-31'-Sである。柱穴は、61~105cm×68~108cmの隅丸方形である。柱痕跡は14~21cmである。埋土は、にぶい黄褐色シルト、にぶい黄橙色シルト、灰黄褐色粘土質シルトなどである。N3W1・6柱穴でSA1615一本柱列と接続している。遺物は出土しなかった。

SA1620板跡跡、SB1555・1610掘立柱建物跡、SD1569B・C・D・E・1593・1604・1607溝跡、SK1613土坑に切られている。

SB1595A・B 掘立柱建物跡 南北3間(総長8.04m、柱間寸法276cm)、東西3間(総長7.04m、柱間寸法232~240cm)の純柱建物跡で、方向は北柱列でE-31'-Sである。柱穴は側柱が88~124cm×114~140cmの隅丸方形であるが、やや不整の隅丸方形を呈するものもある。柱痕跡は28~32cmである。内部の柱穴は80~90cm×104~112cmの隅丸方形で柱痕跡は34cm程である。ほぼ同位置・同規模で建て替えられているが、柱穴掘り方の規模は新しい時期のもの(A)がやや大きくなっている。

遺物は、SB1595AのN2W4・N1W3・N1W4柱穴掘り方より、土師器环片・壺片、須恵器环片が数点出土している。

SB1545・1605掘立柱建物跡、SD1594・1574溝跡、SK1568・1576土坑に切られている。

SB1605 掘立柱建物跡 梁行3間(総長6.7m程、柱間寸法218~224cm)、桁行8間(総長17.6m、柱間寸法168~247cm)の東西棟の建物跡で、方向は北桁行でE-31'-Sである。柱穴は96~126cm×94~194cmの隅丸方形であるが、やや不整の隅丸方形を呈するものもある。柱痕跡は28~42cmである。N1W1~4・N2W9・N4W2・N4W3・N4W4柱穴で抜き取り穴を伴っている。

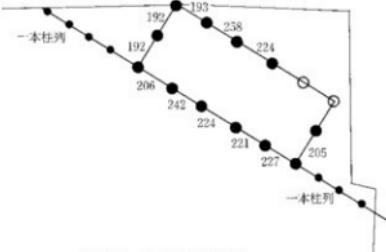
遺物は、N3W5・N1W6柱穴より土師器壺片、須恵器环片が数点、N2W9柱穴抜き取り穴より土師器壺体部片が1点出土した。

SB1595A・B掘立柱建物跡を切り、SB1545・1560・1565・1570掘立柱建物跡、SD1574・1592・1594溝跡、SD1600石組溝跡、SK1568・1627土坑に切られている。

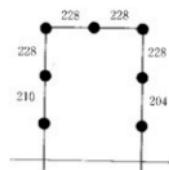
SB1545 掘立柱建物跡 桁行3間以上(総長5.2m以上、柱間寸法204~228cm)、梁行2間(総長4.56m、柱間寸法228cm)の南北棟の建物跡で、方向は西桁行でN-0'-Sである。柱穴は68~96cm×92~108cmの隅丸方形で、柱痕跡は18~28cmである。柱穴の深さは60cm程である。埋土は、暗褐色シルト、にぶい黄褐色シルト、褐色シルトなどで、わずかではあるが柱痕跡のみに焼土、炭化物を含んでいる。N1W2・N1W3・N3W3柱穴で抜き取り穴を伴っている。西桁柱列とSD1600石組溝跡の東辺との距離は、4.9m程である。

遺物は、N1E3柱穴掘り方より土師器环片・壺片、須恵器壺片が数点出土した。またN2E1・N3E1柱穴掘り方より土師器环片・壺片が数点、N3E1柱穴抜き取り穴より土師器环片が2点出土した。

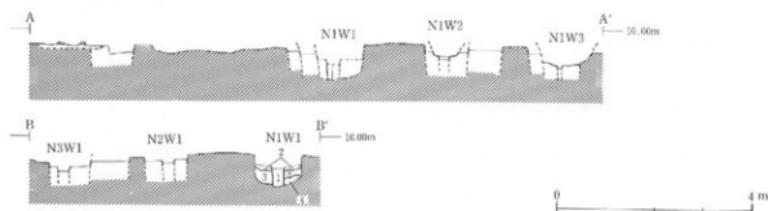
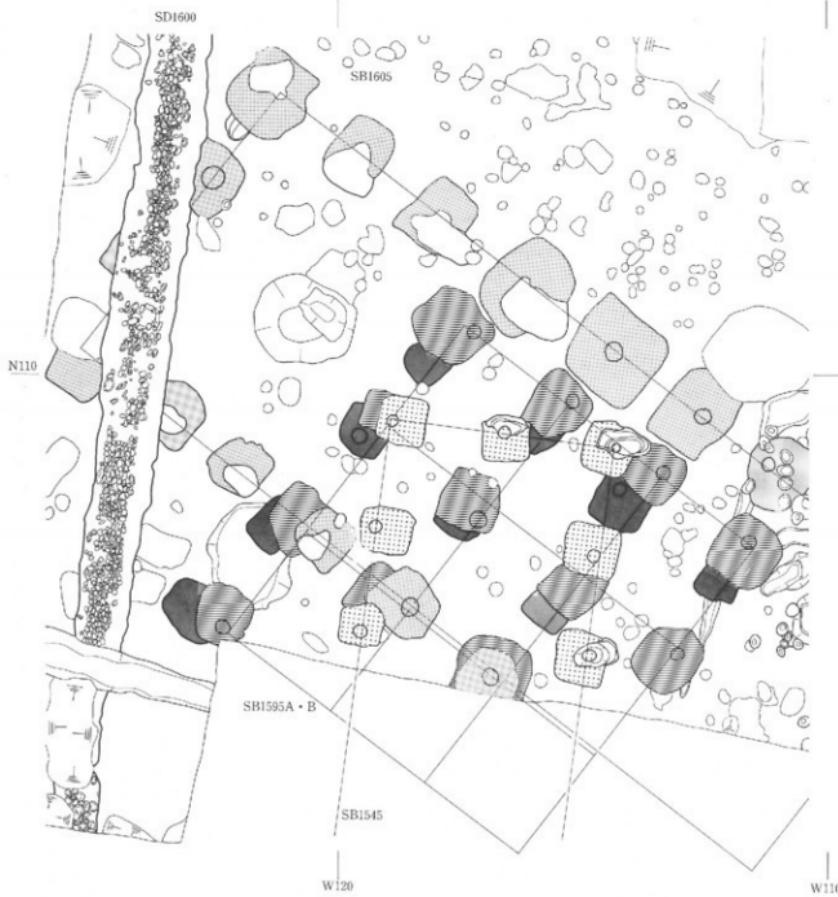
SB1595A・B及び1605掘立柱建物跡を切っている。



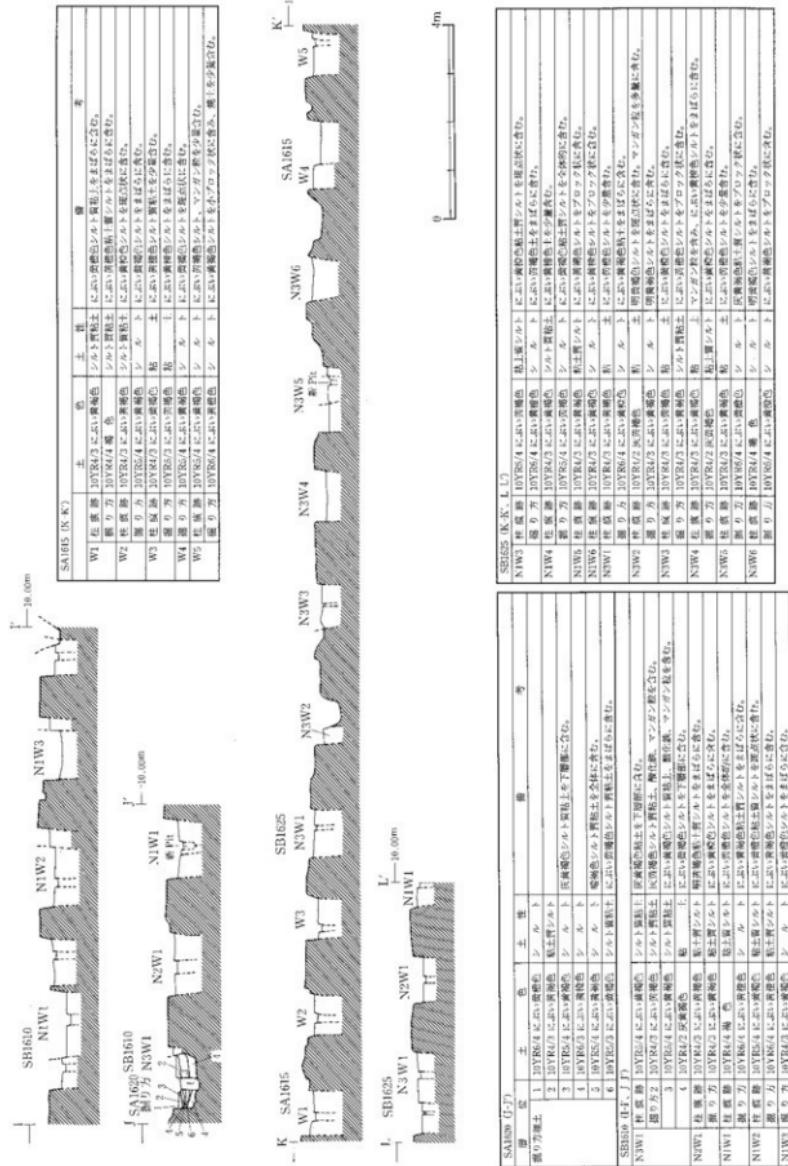
第5図 SB1625模式図



第6図 SB1545模式図



第8図 SB 1545・1595A・B・1605掘立柱建物跡平面図 (1/100)



第9図 SAI1610・本柱列・SB1610・1620・1625掘立柱体断面図 (1/100)

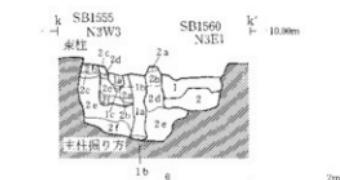
SB1545 (A-A', B-B')			
柱穴位置	土色	土性	備考
N1W1 柱頭部 掘り方1 N1W2	10YR2/3 黄褐色 10YR3/3 塗褐色 10YR5/4 にぶい黄褐色 10YR4/4 塗褐色	粘土 シルト 粘土質粘土を少しだけ含む シルト	薄褐色土を下層に少量含む にぶい黄褐色土を少しだけ含む にぶい黄褐色を少しだけ含む にぶい黄褐色
柱頭部 掘り方2 柱底部 掘り方3	10YR2/3 黄褐色 10YR3/3 塗褐色 10YR4/4 塗褐色	粘土 シルト 粘土質粘土を少しだけ含む シルト	薄褐色土を少しだけ含む にぶい黄褐色土を少しだけ含む にぶい黄褐色を少しだけ含む にぶい黄褐色
柱頭部 掘り方4 柱底部 掘り方	10YR2/3 黄褐色 10YR4/4 塗褐色 10YR4/4 塗褐色	粘土 シルト 粘土質粘土を少しだけ含む シルト	薄褐色土を少しだけ含む にぶい黄褐色土を少しだけ含む にぶい黄褐色土を少しだけ含む にぶい黄褐色
N1W3 柱頭部 掘り方	10YR2/4 塗褐色 10YR4/4 塗褐色	粘土 シルト	薄褐色土をこすりかたで含む 明黄色を含む
N3W1 柱頭部 掘り方	10YR3/4 塗褐色 10YR4/4 塗褐色	粘土 シルト	薄褐色土を少しだけ含む 明黄色を含む
N2W1 柱頭部 掘り方	10YR2/4 塗褐色 10YR4/4 塗褐色	粘土 シルト	にぶい黄褐色土を少しだけ含む 明黄色を含む

表3 SB1545 挖立柱建物跡記表

SB1555 挖立柱建物跡 梁行2間(總長5.92m、柱間寸法292~300cm)、桁行3間以上(總長8.76m以上、柱間寸法288~292cm)の東西棟の建物跡で、方向は北桁行でW-0°-Eである。柱穴は84~140cm×132~140cmの隅丸方形で、柱痕跡は29~32cmである。柱穴の深さは100cm程度である。N 3 W 1 及びN 3 W 3 柱穴では、主柱にはぼ密接して建物内側に束柱の痕跡が検出された。束柱は、主柱を建てた後に掘り込まれている。束柱の掘り方は、一辺30cm程度の小規模なもので、柱痕跡は直径20cm程度である。またP.76は、掘り方は検出されなかつたが、柱間寸法や柱筋の状況、堆積土からみて束柱の痕跡とみられる。埋土は、にぶい黄褐色粘土質シルト、灰黄褐色粘土質シルト、にぶい黄褐色粘土質シルト及びシルトなどである。各柱穴の柱痕跡には多量に焼土が含まれているが、掘り方には全く含まれていない。また、N 1 W 2 • N 1 W 3 • N 3 W 4 柱穴で抜き取り穴を伴っており、抜き取り穴の埋土にも多量の焼土が含まれている。

遺物は、N 1 W 1 掘り方より平瓦片G-71(第11図1・図版29-1)、壁材の一部とみられるスサ入り粘土塊P-29(図版29-2)の他、N 1 W 2 抜き取り穴より弥生土器甕の底部片が1点、また各柱穴より土器器环・甕片が数点出土した。

SA1615・本柱列・SB1610・1625 挖立柱建物跡を切り、SB1560・1570 挖立柱建物跡、SD1569A・B・C・D・E・1593・1607 溝跡に切られている。

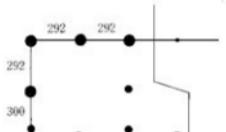


SB1560 N3W3 (k-k')			
層位	土色	土性	備考
1 10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	黄褐色砂質シルト、燒土を含む。	
2 10YR4/4 にぶい黄褐色	シルト	灰黄褐色の粘土質シルトを含む。	

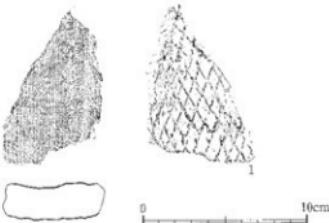
SB1555 N3W3 (K-K')				
束柱	柱頭部 掘り方	柱頭部 掘り方	柱頭部 掘り方	柱頭部 掘り方
1 a 10YR5/4 にぶい黄褐色 1 b 10YR5/2 にぶい黄褐色 1 c 10YR6/1 にぶい黄褐色 2 a 10YR6/3 にぶい黄褐色 2 b 10YR4/2 にぶい黄褐色 2 c 10YR6/4 にぶい黄褐色 2 d 10YR6/4 にぶい黄褐色 2 e 10YR6/4 にぶい黄褐色 2 f 10YR6/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト	燒土を多量に含む。 にぶい黄褐色シルトを含む。 にぶい黄褐色シルトを含む。 にぶい黄褐色シルトを含む。 にぶい黄褐色シルトを含む。 にぶい黄褐色シルトを含む。 にぶい黄褐色シルトを含む。 にぶい黄褐色シルトを含む。 にぶい黄褐色シルトを含む。 にぶい黄褐色シルトを含む。 にぶい黄褐色シルトを含む。 にぶい黄褐色シルトを含む。		
3 a 10YR6/3 にぶい黄褐色 3 b 10YR6/1 にぶい黄褐色 3 c 10YR4/3 にぶい黄褐色 3 d 10YR5/1 にぶい黄褐色 3 e 10YR6/2 にぶい黄褐色 3 f 10YR6/4 にぶい黄褐色	砂質シルト 砂質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト 砂質シルト 砂質シルト	にぶい黄褐色の粘土質シルトを含む。 にぶい黄褐色の粘土質シルトを含む。 にぶい黄褐色の粘土質シルトを含む。 にぶい黄褐色の粘土質シルトを含む。 にぶい黄褐色の粘土質シルトを含む。 にぶい黄褐色の粘土質シルトを含む。		

第12図 SB1555 N 3 W 3 柱穴セクション図。

SB1560 挖立柱建物跡 梁行6間(總長12.6m、柱間寸法168~224cm)、梁行5間(總長9.0m、柱間寸法168~196cm)の南北棟で、東西に扉を有する建物跡である。方向は北桁行でE-6°-Nである。身舎の柱穴は68~104cm×



第10図 SB1555模式図



第11図 SB1555 N 1 W 1 出土遺物

86~160cmの圓丸方形で、柱痕跡は20~26cmである。廻の柱穴は48~84cm×84~96cmの圓丸方形で、柱痕跡は16~22cmである。身舎は中央で3間×3間に仕切られている。各柱穴掘り方や柱間寸法にややばらつきがある。埋土は、にぶい黄褐色砂質シルト、褐色シルト及び砂質シルト、黄褐色砂質シルトなどである。柱痕跡及び掘り方とともに焼土・炭化物を含んでいる。N 2 W 2・N 5 W 2柱穴で抜き取り穴を伴っている。

各柱穴より、土師器坏片・甕片・須恵器坏片・甕片が數点出土している。

SA1615一本柱列、SB1555・1580・1605・1610掘立柱建物跡を切り、SA1590柱列、SB1565・1570掘立柱建物跡、SD1569D・E・1592・1593・1601溝跡、SK1573・1577土坑に切られている。

SB1565 掘立柱建物跡 南北1間以上（総長1.2m以上）、東西2間かそれ以上（総長3.2m以上）の建物跡で、重複により詳細は不明である。柱穴は88×114cmの圓丸方形で、柱痕跡は22cmである。埋土は、灰黄褐色シルト、明黄褐色砂質シルト、にぶい黄褐色粘土質シルトなどである。

遺物は、N 2 W 1柱穴掘り方より内外面黒色処理された土師器C-776坏（図版29-3）底部片が1点、またN 1 W 1柱穴掘り方からも内外面黒色処理された土師器坏底部片が2点の他、各柱穴より土師器坏片・甕片、須恵器坏片・甕片が數点出土している。

SB1560・1605掘立柱建物跡を切り、SB1570掘立柱建物跡に切られている。

SB1570 掘立柱建物跡 桁行5間（総長10.66m、柱間寸法188~242cm）、梁行3間（総長6.1m、柱間寸法172~248cm）の南北棟の建物跡で、方向は北梁行でE-6°-Nである。柱穴は96~164cm×68~112cmの圓丸長方形で、柱痕跡は16~28cmである。掘り方の形状や規模にややばらつきがある。埋土は、褐色砂質シルト、暗褐色シルト、黄褐色砂質シルトなどである。柱痕跡及び掘り方ともに、焼土・炭化物を含んでいる。N 1 W 1柱穴のみ抜き取り穴を伴っている。埋土は、暗褐色シルト、褐色シルトなどである。

遺物は、N 6 W 1柱穴掘り方より底部手持ちヘラケズリ再調整された須恵器E-386坏（図版29-4）底部片の他、各柱穴より土師器坏片・甕片、須恵器坏片・甕片が少しあり出土している。

SB1555・1560・1565・1605掘立柱建物跡を切り、SA1590柱列、SK1577・1578・1581・1582土坑に切られている。

SB1575 掘立柱建物跡 建物跡の北柱列の一部を1間分検出したが、柱列になる可能性もある。一辺86cm程の圓丸方形の掘り方の中に、直径18cm程の柱痕跡を検出した。方向はE-14°-Nである。

遺物は、N 1 W 2柱穴掘り方より、壁材の一部とみられるスサ入り粘土塊P-28（図版29-8）が出土している。

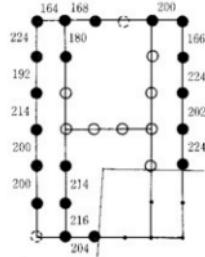
SB1585掘立柱建物跡、SD1569溝跡に切られている。

SB1580 掘立柱建物跡 建物跡の北東隅となる柱穴を1基検出した。柱穴は、78×118cm程の圓丸方形で、柱痕跡は26cmである。遺物は出土しなかった。

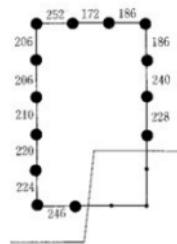
SB1560掘立柱建物跡に切られている。

SB1585 掘立柱建物跡 建物跡の北東隅となる柱穴を1基検出した。柱穴は、84×97cm程のやや不整の圓丸方形で、柱痕跡は22cmである。遺物は出土しなかった。

SB1575掘立柱建物跡を切っている。

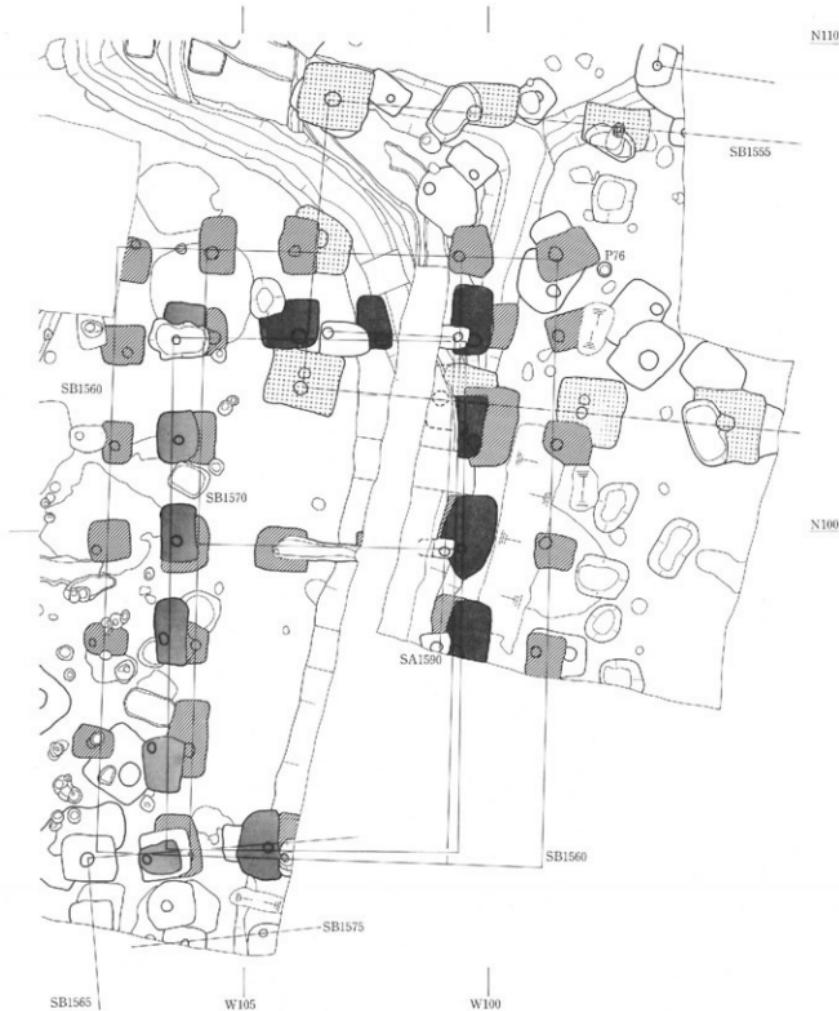


第13図 SB1560模式図

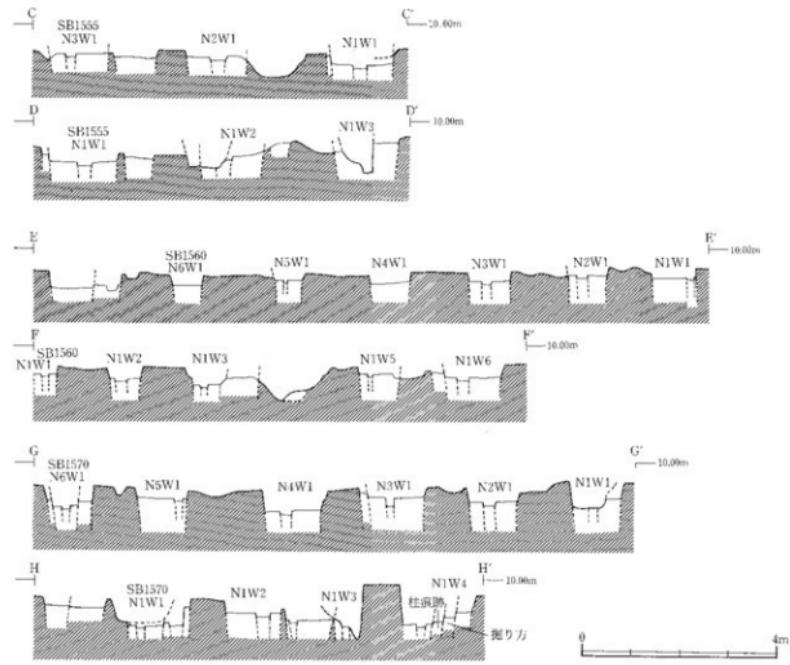


第14図 SB1570模式図

SA1590 柱列跡 東西 1 間（総長2.68m、柱間寸法268cm）、南北 3 間（総長6.4m 以上、柱間寸法208cm）の柱列で、方向は東西が W-4°-S、南北が N-4°-W である。南北方向に 3 間分延び、西に L 字に屈曲している。柱穴は最も良好に残存しているもので68×100cmの隅丸方形で、柱痕跡は22~24cmである。埋土は、褐色粘土質シルト、にぶい黄褐色粘土質シルト、黄褐色粘土質シルトなどである。N 1 W 1 柱穴で、掘り方に焼土を多量に含んでいる。遺物は出土しなかった。SB1555・1560・1570 掘立柱建物跡を切り、SD1569 溝跡に切られている。



第15図 SA1590柱列・SB1555・1560・1565・1570・1575掘立柱建物跡平面図 (1/100)



SB1555 (C-C')				
柱穴位置	土色	土性	備考	番号
N3W1	粘土質 褐色	シルト質粘土	地土・炭化物を含む。	
裏り方	16YR8/4 ないし 黄褐色	粘土質シルト	に多い黄褐色粘土質シルトを含む。	
N2W1	粘土質 褐色	シルト	に多い黄褐色土。地土・炭化物を含む。	
裏り方	16YR8/4 ないし 黄褐色	シルト	に多い黄褐色土を含む。	
NIW1	粘土質 褐色	シルト	補隙粘土。地土・炭化物を含む。	
裏り方	16YR8/4 ないし 黄褐色	シルト	に多い黄褐色土を含む。	
(D-D')				
NIW2	粘土質 褐色	シルト	地土・炭化物を多量に含む。	
裏り方	16YR8/4 ないし 黄褐色	シルト	に多い黄褐色のシルトを多量に含む。	
NIW3	粘土質 褐色	シルト	に多い黄褐色シルトを多量に含む。	

SB1560 (E-E')				
柱穴位置	土色	土性	備考	番号
N6W1	柱底跡	10YR3/4 前褐色	シルト 地土・炭化物を少量含む。	
裏り方	16YR8/4 暗褐色	シルト 地上部 黃褐色土・地土・炭化物を含む。		
N5W1	柱底跡	10YR3/4 前褐色	シルト 地上部 地土を少量含む。	
裏り方	10YR5/5 黄褐色	砂質シルト	に多い黄褐色土。地土を含む。	
N4W1	柱底跡	10YR5/3 ないし 黄褐色	砂質シルト 地下部 黃褐色土・地土・炭化物を含む。	
裏り方	10YR5/4 ないし 黄褐色	シルト 地土・炭化物を含む。		
N3W1	柱底跡	10YR4/3 暗褐色	砂質シルト 地上部 黃褐色土・地土・炭化物を含む。	
裏り方	10YR4/4 暗褐色	シルト 地上部 黃褐色土・地土・炭化物を含む。		
N2W1	柱底跡	10YR4/4 暗褐色	砂質シルト 地上部 黃褐色土・地土・炭化物を含む。	
裏り方	10YR4/4 暗褐色	シルト 地上部 黃褐色土・地土・炭化物を含む。		
NIW1	柱底跡	10YR4/4 暗褐色	砂質シルト 地上部 黃褐色土・地土・炭化物を含む。	

SB1570 (G-G')				
柱穴位置	土色	土性	備考	番号
N6W1	柱底跡	10YR4/4 暗褐色	シルト 黑褐色シルト。地土・炭化物を含む。	
裏り方	10YR4/4 暗褐色	砂質シルト	黒褐色土をブロック状に含む。	
N5W1	柱底跡	10YR4/4 暗褐色	シルト 黑褐色土。地土・炭化物を含む。	
裏り方	10YR4/4 暗褐色	砂質シルト	黒褐色シルト。地土・炭化物を含む。	
N4W1	柱底跡	10YR4/4 暗褐色	シルト 地土・炭化物をわずかに含む。	
裏り方	10YR4/4 暗褐色	砂質シルト	黒褐色土・地土・炭化物を含む。	
N3W1	柱底跡	10YR4/4 暗褐色	シルト 黑褐色土。地土・炭化物を含む。	
裏り方	10YR4/4 暗褐色	シルト 地上部 黑褐色土・地土・炭化物を含む。		
N2W1	柱底跡	10YR4/4 暗褐色	シルト 黑褐色土。地土・炭化物を含む。	
裏り方	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	黒褐色土を少量含む。	
NIW1	柱底跡	10YR4/2 暗褐色	シルト 地土・炭化物を含む。	
裏り方	10YR4/2 暗褐色	砂質シルト	黒褐色土を少量含む。	

SB1570 (H-H')				
柱穴位置	土色	土性	備考	番号
N1W2	柱底跡	10YR4/1 暗褐色	シルト 地上部 黑褐色土・地土・炭化物を含む。	
裏り方	10YR6/6 明黄色	砂質シルト	に多い黄褐色土・地土を含む。	
N1W3	柱底跡	10YR4/4 暗褐色	シルト 地上部 黑褐色土・地土・炭化物を含む。	
裏り方	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	地土・炭化物を含む。	
N1W4	柱底跡	10YR4/4 暗褐色	シルト 地上部 黑褐色土・地土・炭化物を含む。	
裏り方	10YR6/4 ないし 黄褐色	砂質シルト	黒褐色土・地土・炭化物を含む。	

第16図 S B 1555・1560・1570掘立柱建物跡断面図 (1/100)

SB1630 挖立柱建物跡 建物跡の南西隅となる柱穴を1基検出した。柱穴は、26cm以上×63cm以上の隅丸方形で柱痕跡は20cm程である。埋土は、暗褐色シルト、褐色シルトなどで、柱痕跡及び掘り方に焼土を多量に含んでいる。遺物は出土しなかった。

SB1610 挖立柱建物跡を切っている。

SB1635 挖立柱建物跡 建物跡の南西隅の柱穴から南北方向に2間分を検出した。検出した総長は4.6mで、柱間寸法は224cmである。方向は、西柱列でN-2°-Eである。柱穴は、56~66cm×70~89cmの隅丸方形で、柱痕跡は19cmである。埋土は、黄褐色シルト、暗褐色シルト、褐色シルトなどである。遺物は出土しなかった。

SB1610 挖立柱建物跡、SD1606溝跡を切り、SD1604・1607・1609溝跡に切られている。

SB1640 挖立柱建物跡 建物跡の南東隅の柱穴から東西方向に1間分を検出した。検出した総長は2.3mで、柱間寸法は230cmである。方向は、南柱列でE-7°-Nである。柱穴は、68~70cm×88cm程の隅丸方形で、柱痕跡は20cm程である。埋土は、褐色シルト質粘土などである。S 1 E 1・2柱穴で抜き取り穴を伴っている。

遺物は、S 1 E 1抜き取り穴より土師器坏片・甕片が數点出土している。

小ピットに切られている。

S1600 石組溝跡 上幅92~148cmの布掘り状の据え方のなかに、直径15cm前後の扁平な河原石を敷き詰めて底面としている。底面石敷の残存幅は、最も良好に残存する部分で66cmである。石組溝の側壁部分は良好には残存していない。しかし、一部、底面に敷かれた石よりも大きめの石を立てて据えている箇所があり、8~10cm程側壁として立ち上がることから、さらに上方に石が積み上げられていたと考えられる。方向は、据え方の東辺でN-1°-Eである。調査区内では北から南に緩やかに傾斜しており、底面の比高差は15cm程である。据え方の底面はやや凹凸があり、特に東辺では据え方の底面がやや落ち込んでいる。壁は西辺では緩やかに立ち上がるが、東辺はほぼ垂直に立ち上がる。深さは6~10cm程であるが、一部20cm以上ある箇所もある。埋土は、褐色シルト質粘土である。

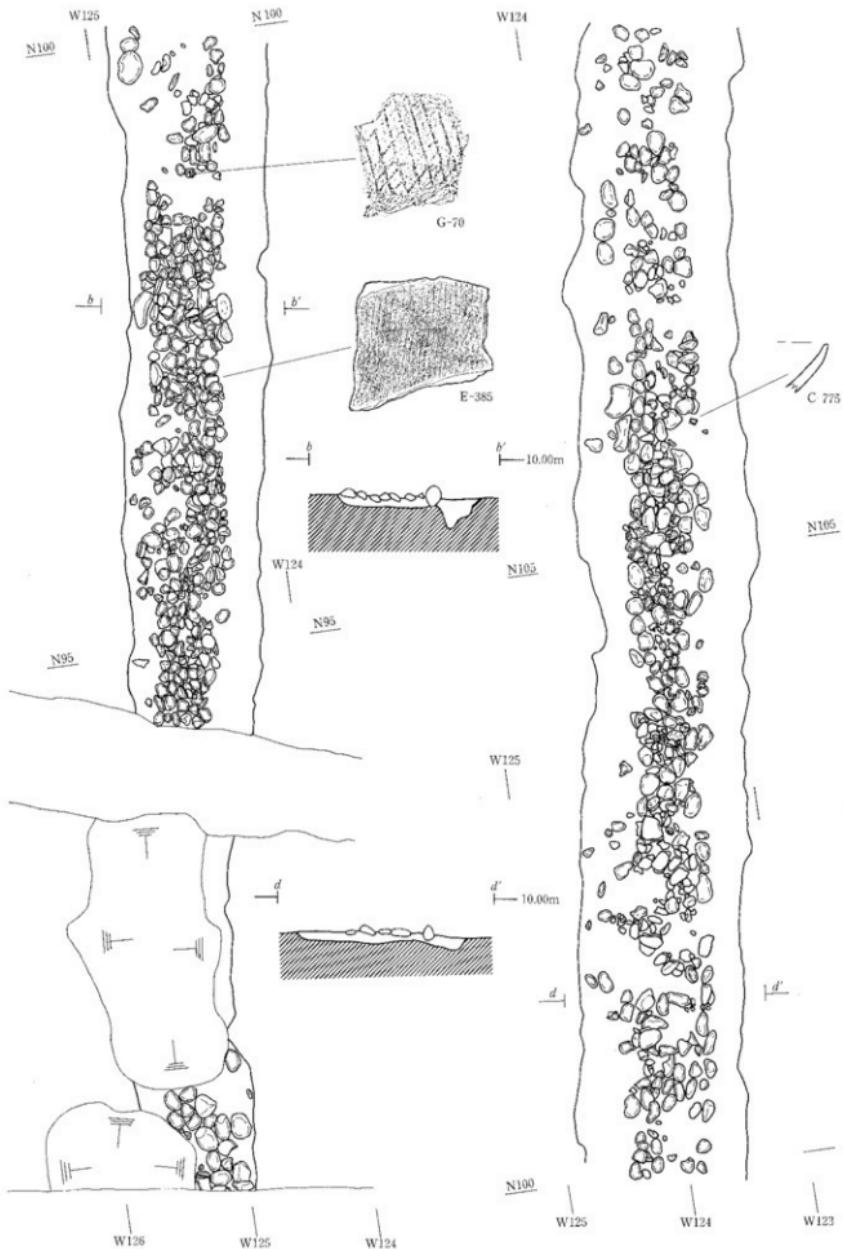
遺物は、石組溝跡底面より須恵器E-385甕（第20図1・図版29-7）、G-70（第20図2・図版29-5）平瓦片、土師器C-775坏（第20図3・図版29-6）が出土している。SD1571・1611溝跡に切られている。

SX1616A・B・C 不整の梢円形の土坑が3基連結したような形状を呈している。各土坑は長軸188~292cm×短軸172~216cmで、検出した総長は7.6m程である。深さは43~52cmで、立面形は半球状である。底面には工具痕跡のようないくつかの凹凸がある。埋土は大別2層に分層され、第1層は褐色シルトを基調とし、暗褐色及びぶい黄褐色シルトである。細分はしているが、各細分層は土質が近似しており、一括堆積とみられる。第2層は、基本層第II層をブロック状に含んだ黄褐色シルトである。

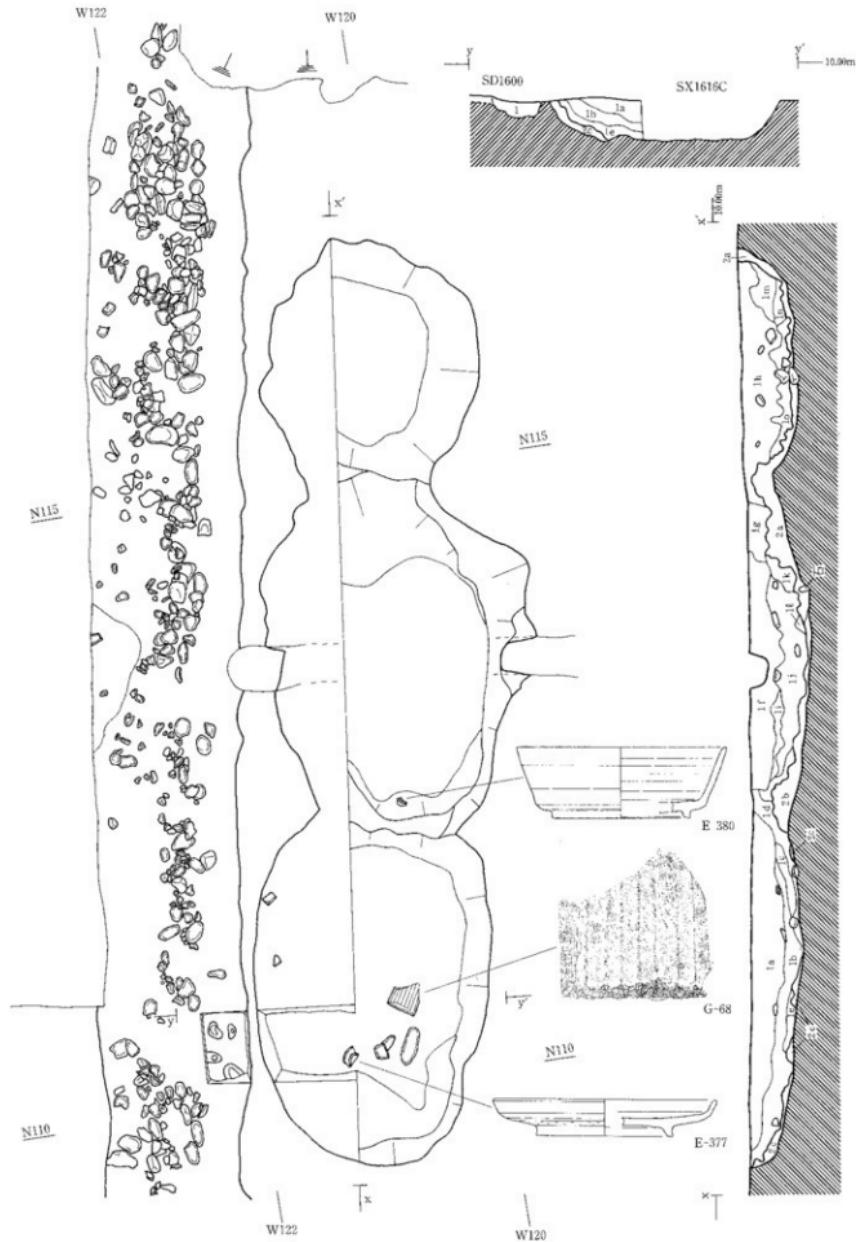
遺物は、SX1616Bの底面より須恵器E-380高台付坏（第19図4・図版30-7）、SX1616Cの底面直上層より土師器C-773坏（第19図5・図版30-8）、E-377高台付皿（第19図3・図版30-9）、平瓦G-68（第19図7・図版30-13）、第1a層底面よりE-378坏（第19図1・図版30-10）、E-379坏（第19図2・図版30-11）、第1a層中よりE-381円面観片（図版30-12）、検出面より平瓦G-69（第19図6・図版30-14）が出土したほか、SX1616B・C埋土中より土師器坏片・甕片、須恵器坏片・甕片が少量出土している。SD1611溝跡に切られている。

SD1600 (y-y')			1 b	10YR4/4 褐色	シルト 明黄色土を少量含む。
層位	上	色	土性	標	シルト 黄褐色土・灰化物を少混合。
1	10YR4/4 褐色	シルト質粘土		1 l	10YR4/3 にぶい黄褐色
SX1616 A・B・C (x-x')				1 j	10YR4/4 褐色
層位	上	色	標	1 k	10YR4/3 にぶい黄褐色
1 a	10YR4/4 褐色	シルト	灰化物を下間に多く含む。	1 f	10YR4/4 灰褐色
1 b	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	灰黃褐色土・灰化物・燒土を含む。	1 m	10YR4/4 褐色
1 c	10YR4/4 褐色	シルト	灰褐色土・灰化物を少混合。	1 n	10YR4/5 灰褐色
1 d	10YR4/4 灰褐色	シルト	明黄色土・灰化物を少混合。	1 o	10YR4/3 にぶい黄褐色
1 e	10YR4/4 灰褐色	シルト	明黄色土・灰化物・燒土を含む。	1 p	10YR4/4 褐色
1 f	10YR4/4 褐色	シルト	赤褐色土・燒土・灰化物を含む。	2 a	10YR5/5 黄褐色
1 g	10YR4/4 褐色	シルト	燒土を少量含む。	2 b	10YR5/6 黄褐色
				2 c	10YR5/6 黄褐色
					砂質シルト 明黄色土を一部に含む。

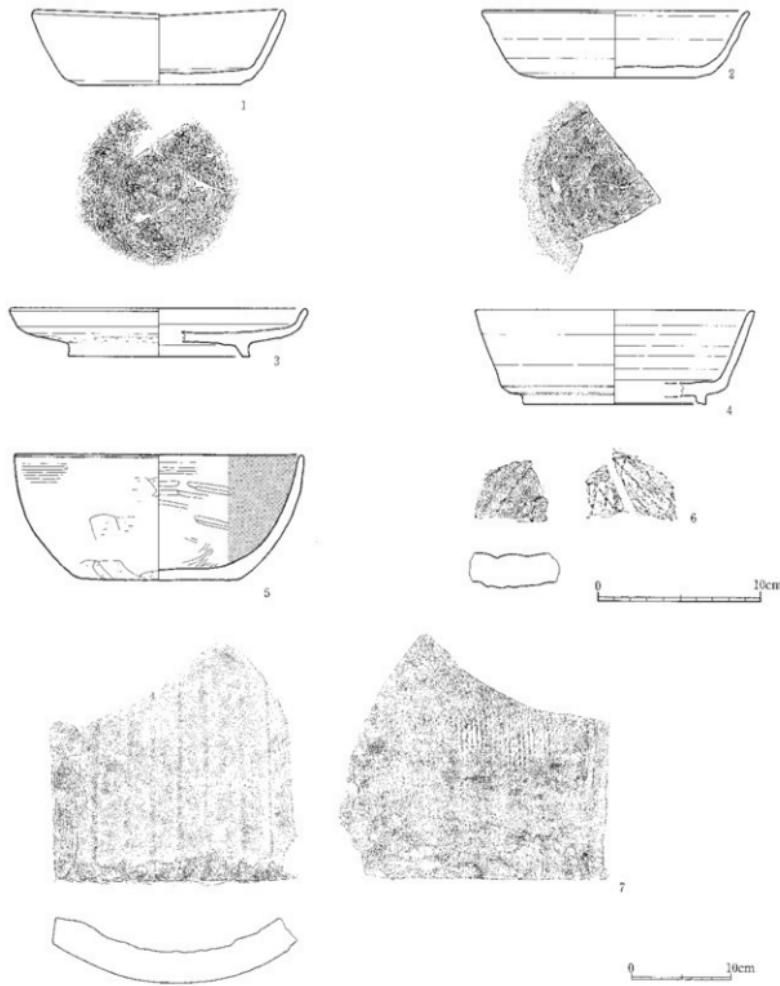
表4 SD1600 石組溝跡・SX1616A・B・C 鑑記表



第17図 SD 1600石組溝跡平・断面図（1）(1/40)

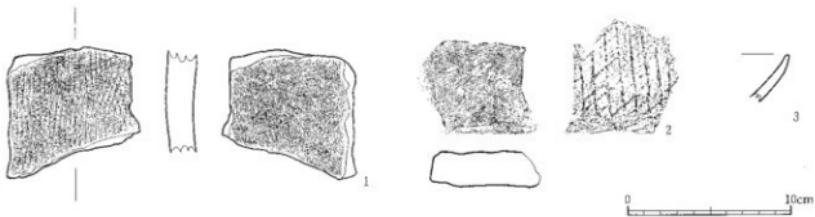


第18図 SD1600石組溝跡・SX1616A・B・C平・断面図(2) (1/40)



回数 番号	登錄 番号	形状・胎形	出土 地點	重 量 (kg)	外 面 調 査			内 面 調 査	備 考	参考 文献
					出 土 遺 物	壁 部	底 部			
1 E-378	直 筒 器 ・ 环	SX1616C 1a層 底面	4.6	15.6	10.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	30-10
2 E-379	直 筒 器 ・ 环	SX1616C 1a層 底面	4.1	16.4	9.6	ロクロナデ	ロクロナデ	手持ヘラケズリ	ロクロナデ	30-11
3 E-377	直 筒 器 ・ 高台付 頭	SX1616C 底面直上	3.0	18.4	5.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	30-9
4 E-380	直 筒 器 ・ 高台付 环	SX1616B 底 面	5.8	17.2	11.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	1/8薄片 30-7
5 C-773	土 器 ・ 环	SX1616C 底面直上	7.7	17.8	9.8	ロコナデ	ロコナデ	ヘラケズリヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ
6 G-69	瓦 ・ 平 瓦	SX1616C 検 出 部						創出部 内面		30-14
7 G-68	瓦 ・ 半 瓦	SX1616C 底面直上						内面	内面	30-13

第19図 SX1616A・B・C出土遺物



第20図 SD1560石組溝跡出土遺物

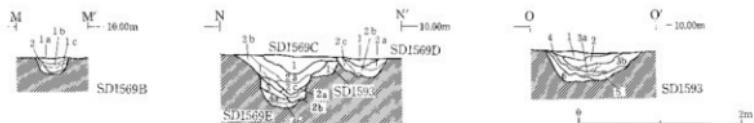
SD1569A・B・C・D・E・1593 溝跡 調査区を南北にクランク状に屈曲しながら継続する溝跡である。調査区の北半部ではわずかに位置が異なっているが、平面形態・方向などほぼ同じである。南半部ではすべての溝が重複している。これらの遺構の中では SD1569A 溝跡が最も新しく、以下順に SD1593 溝跡が最も古い遺構である。6時期に渡り改修されたと考えられる。

【SD1569A】 上幅17~30cm、底面幅7~15cm、深さ30cm、断面形は逆台形の溝跡である。壁はやや外傾しながら直線的に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。検出した南端から屈曲しながら南北方向に4.4m程延び、途切れている。堆積土は、にぶい黄褐色シルト、褐色粘土質シルトなどである。

SB1555・1610 掘立柱建物跡を切っている。遺物は出土しなかった。

【SD1569B】 上幅26~44cm、底面幅18~28cm、深さ11~21cm、断面形は逆台形の溝跡である。壁はやや外傾しながら直線的に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向は南北部分で N-0°-S で、検出した総長は12.4m 程である。堆積土は、にぶい黄褐色シルト、褐色シルト、灰黄褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

SB1555・1610・1625 掘立柱建物跡、SD1609 溝跡を切り、SD1601 溝跡に切られている。

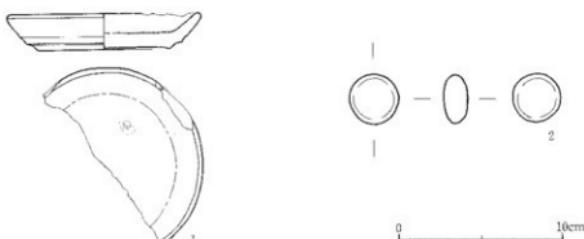


SD1569B (M-M')						
層位	計	色	土 性	圖	考	
1 a	10YR4/4	暗 色	シ ル ト	炭化物・黄褐色土色をわずかに含む。		
1 b	10YR4/3	にぶい黄褐色	シ ル ト	黄褐色土を小プロック状に含む。		
1 c	10YR4/2	灰 黄褐色	シ ル ト	炭化物をわずかに含む。		
2	10YR4/2	灰黄褐色	シ ル ト	黄褐色土を粒状に多量に含む。		
SD1569C (N-N')						
1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シ ル ト	炭化物を含む。		
2 a	10YR4/3	にぶい黄褐色	シ ル ト	明黄色土を少量含む。		
2 b	10YR4/3	にぶい黄褐色	シ ル ト	明黄色土を多量に含む。		
2 c	10YR4/4	褐 色	シ ル ト	明黄色土を多量に含む。		
SD1569D (O-O')						
1	10YR4/4	褐 色	シ ル ト	土を帶状に含む。		
2 b	10YR4/2	灰 黄褐色	シ ル ト	黄褐色土を少量含む。		
3	10YR4/4	褐 色	シ ル ト	土を帶状に含む。		
4 a	10YR4/2	灰 黄褐色	シ ル ト	炭化物を少量含む。炭化物を全体に含む。		
4 b	10YR4/2	灰 黄褐色	シ ル ト	土。炭化物少く、炭化鉄を个体に含む。		
SD1593 (S-S')						
1	10YR4/4	褐 色	シ ル ト	黄褐色土を多量に含む。		
SD1569 (O-O')						
1	10YR3/4	褐 色	シ ル ト	にぶい黄褐色土を全体に含む。		
2	10YR3/4	褐 色	シ ル ト	炭化物を少量含む。		
3	10YR3/3	褐 色	シ ル ト	にぶい黄褐色土をブロック状に含む。		
3 b	10YR3/4	褐 色	シ ル ト	にぶい黄褐色土、筋土を少量含む。		
4	10YR3/2	黑褐色	シ ル ト	炭化土を全体に含む。		
5	10YR3/3	にぶい黄褐色	シ ル ト	炭化物を全体に含む。		
6	10YR3/3	にぶい黄褐色	シ ル ト	筋土を多く含む。炭化鉄を含む。		

SD1593 (N-N')						
層位	計	色	土 性	圖	考	
1	10YR4/4	褐 色	シ ル ト	粘土質シルト。縦断面に含む。		
2 a	10YR4/2	灰 黄褐色	シ ル ト	炭化物を全体に含む。		
2 b	10YR4/2	灰 黄褐色	シ ル ト	炭化物を少く含む。		
3	10YR4/4	褐 色	シ ル ト	粘土質シルト。縦断面に含む。		
4 a	10YR4/2	灰 黄褐色	シ ル ト	炭化物を少く含む。炭化鉄を全体に含む。		
4 b	10YR4/2	灰 黄褐色	シ ル ト	土。炭化物少く、炭化鉄を个体に含む。		
SD1569 (O-O')						
1	10YR3/4	褐 色	シ ル ト	にぶい黄褐色土を全体に含む。		
2	10YR3/4	褐 色	シ ル ト	炭化物を少量含む。		
3	10YR3/3	褐 色	シ ル ト	にぶい黄褐色土をブロック状に含む。		
3 b	10YR3/4	褐 色	シ ル ト	にぶい黄褐色土、筋土を少量含む。		
4	10YR3/2	黑褐色	シ ル ト	炭化土を全体に含む。		
5	10YR3/3	にぶい黄褐色	シ ル ト	炭化物を全体に含む。		
6	10YR3/3	にぶい黄褐色	シ ル ト	筋土を多く含む。炭化鉄を含む。		

第21図 SD1569 B-C-D-E-1593 溝跡断面図

【SD1569C】 上幅36~70cm、底面幅24~32cm、深さ23~27cm、断面形はU字形の溝跡である。壁は外傾しながら緩やかに立ち上がり、底面はやや凹凸がある。方向は南北部分でN-6°-Eで、検出した総長は12m程である。堆積土は、褐色シルト、暗褐色シルト及び粘土質シルトである。



遺物は、石製品K-209(第22図2、図版29-10)、陶器I-39皿(第22図1、図版29-9)の他、土師器壊片、須恵器壊片、磁器片が数点出土した。

第22図 SD1569C溝跡出土遺物

SA1620 板塀跡、SB1625 挖立柱建物跡を切り、SK1613 土坑に切られている。

【SD1569D】 上幅84~126cm、底面幅16~32cm、深さ36~44cm、断面形はV字形の溝跡である。壁は外傾しながら緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向は南北部分でN-13°-Eで、検出した総長は30m程である。堆積土は、暗褐色シルト、褐色シルト、灰黃褐色粘土質シルトである。

遺物は、土師器壊部片1点、須恵器壊部片が1点出土した。

SA1620 板塀跡、SA1590 柱列、SB1555・1560・1570・1575・1625 挖立柱建物跡を切り、SK1603 土坑に切られている。

【SD1569E】 残存する上幅は48~60cm、底面幅40cm程、深さ50~67cm、断面形はU字形の溝跡である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。SD1569D溝跡と同方向・同位置で重複している。堆積土は褐色粘土質シルト、灰黃褐色シルト質粘土、褐色粘土質シルトである。遺物は出土しなかった。

【SD1593】 上幅90~123cm、底面幅50~64cm、深さ13~29cm、断面形は逆台形の溝跡である。壁は外傾しながら緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。方向は南北部分でN-9°-Eで、検出した総長は18.4mである。堆積土は、暗褐色シルト、黒褐色シルト質粘土、にぶい黄褐色粘土質シルトである。

遺物は、土師器壊片・甕片、須恵器壊片・甕片、弥生土器片、剥片石器、スサ入り粘土塊などが少量出土した。うち外面にススの付着した須恵器壊部片が1点含まれている。

SD1571溝跡 上幅58~94cm、底面幅38~64cm、深さ11~29cm、断面形はU字形の溝跡である。壁は緩やかにやや丸みを帯びながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

方向はW-13°-Nで、検出した総長は10.6mである。堆積土は、にぶい黄褐色粘土質シルト、灰黃褐色粘土質シルトである。遺物は出土しなかった。



SD1600 石組溝跡を切っている。

SD1574溝跡 上幅16~46cm、底面幅12~29cm、深さ3~9cm、断面形はU字形の溝跡である。ほぼ底面まで削平され、壁はわずかに立ち上がる程度で、底面は凹凸がある。方向はN-20°-Eで、検出した総長は7.9mである。堆積土は暗褐色シルトである。

SD1571 (P' P')				
部位	土色	土性	種子	等
1 a	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	マンガン結をきむ。	
1 b	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	化粧灰・マンガン結を多量に含む。	
1 c	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色シルトをまばらに含む。	
2	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	褐色シルト質粘土を多量に含む。	

第23図 SD1571溝跡断面図

遺物は、土師器坏片・須恵器坏片・壺片が数点出土している。

SB1595A・B・1605 挖立柱建物跡を切っている。

SD1592 溝跡 上幅42~74cm、底面幅24~60cm、深さ14cm程、断面形はU字形の溝跡である。東西方向に3.4m程検出したが、南に屈曲し途切れている。壁は緩やかに立ち上がり、底面は凹凸がある。堆積土は、暗褐色粘土質シルト、にぶい黄褐色粘土質シルトである。

遺物は、ロクロ土師器D-50 壱(第24図1・図版29-11)が出土した。

SB1605 挖立柱建物跡を切り、SK1591 土坑に切られている。



第24図 S D 1592・1574溝跡断面図・SD 1592溝跡出土遺物

SD1594 溝跡 上幅30~66cm、底面幅26~30cm、深さ 6~12cm、断面形はU字形の溝跡である。長総1.74mを検出した。平面形及び壁面の立ち上がり方は一定していない。堆積土は暗褐色シルトで、灰白色火山灰を含んでいる。

遺物は、鉄製品 N-54 (図版29-12)の他、土師器坏片が1点出土した。

SB1595A・1605 挖立柱建物跡を切っている。

SD1601 溝跡 上幅36~54cm、底面幅29~40cm、深さ 11~14cm、断面形はU字形の溝跡である。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。検出した南端から2.4m程延び、途切れている。堆積土は、褐色シルト、暗褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

SB1560・1610 挖立柱建物跡、SD1569B 溝跡を切っている。

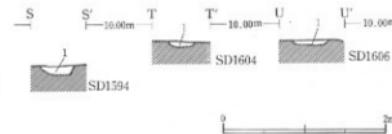
SD1604 溝跡 上幅30~42cm、底面幅21~32cm、深さ 6~10cm、断面形はU字形であるが、ほぼ底面まで削平を受け、壁はわずかに立ち上がる程度である。底面はやや凹凸がある。方向は W-18°-N で、検出した東端から6.08m 西に延び、天地返しの削平により途切れている。堆積土は、暗褐色シルトである。

遺物は、土師器坏片・甕片が3点出土した。

SB1610・1625・1635 挖立柱建物跡を切り、SD1607 溝跡に切られている。

SD1606 溝跡 上幅30~53cm、底面幅25~42cm、深さ 4~6 cm、断面形はU字形であるが、ほぼ底面まで削平を受け、壁はわずかに立ち上がる程度である。底面はほぼ平坦である。方向は W-17°-N で、検出した東端から4.2m 西に延び、途切れている。堆積土は、黄褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

SB1635 挖立柱建物跡に切られている。



第25図 S D 1594・1604・1606溝跡断面図

SD1607 溝跡 上幅57~77cm、底面幅18~25cm、深さ30~42cm、断面形は逆台形の溝跡である。壁は外傾しながら立ち上がり、底面は平坦である。方向はE-32°-Nで、検出した長総は3.2m程である。埋土は、褐色シルト、にぶい黄褐色シルト、暗褐色シルトなどで、各層に焼土をまばらに含んでいる。遺物は出土しなかった。

SB1555・1610・1612・1635 堀立柱建物跡、SD1604 溝跡を切っている。

SD1609 溝跡 上幅50~88cm、底面幅27~64cm、深さ16~28cm、断面形はU字形の溝跡である。壁はやや外傾しながら立ち上がり、底面は凹凸が著しい。底面の凹凸はピット状に3~6cm程落ち込むが、不規則である。方向はW-19°-Nで、検出した東端から西に7.68m延び、天地返しによる削平のため途切れている。堆積土は、暗褐色シルトである。

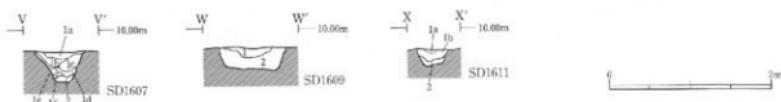
遺物は、土師器环片・甕片、須恵器环片が少量出土した。

SB1635 堀立柱建物跡を切り、SD1569B 溝跡に切られている。

SD1611 溝跡 上幅28~40cm、底面幅14~32cm、深さ8~21cm、断面形は逆台形の溝跡である。壁はやや外傾しながら直線的に立ち上がり、底面はやや凹凸がある。方向はW-0°-Eで、検出した長総は10.12mである。SD1600 石組溝跡を切ったところで途切れている。堆積土は、にぶい黄褐色シルト、黄褐色シルト質粘土である。

遺物は、土師器环片・甕片が数点出土した。

SD1600 石組溝跡、SX1616 を切り、SK1608 土坑に切られている。



SD1607 (V-V')			
部位	土色	土性	備考
1 a	16YR4/4 褐色	シルト	焼土をまばらに含む。
1 b	16YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	褐色土を部分的に含む。
1 c	16YR4/4 黄褐色	シルト	褐色土を多量に含む。
1 d	16YR4/4 黄褐色	シルト	褐色土を少量含む。
1 e	16YR5/6 褐色	シルト	焼土を多量含む。
1 f	16YR5/6 黄褐色	シルト	褐色土を少量含む。
2	16YR3/4 黄褐色	シルト	焼成灰を含む。

SD1609 (W-W')			
部位	土色	土性	備考
1	16YR4/3 黄褐色	シルト	明黄色土を下部に少量含む。
2	16YR3/4 塩化物	シルト	明黄色土を多量に含む。
SD1611 (X-X')			
1 a	16YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	
1 b	16YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	褐色土質シルトをまばらに含む。
2	16YR5/6 黄褐色	シルト質粘土	褐色シルト質粘土をブロック状に含む。

第26図 S D1607・1609・1611溝跡断面図

SK1567 土坑 長軸2.14m、短軸1.82mの不整の円形を呈する土坑で、深さは50cmである。底面はやや凹凸がある。北側で底面から8cm程緩やかにくぼむ部分がある。壁は底面から緩やかに立ち上がり、立面形状は半球形を呈している。堆積土は、褐色粘土質シルト、暗褐色粘土質シルト、にぶい黄褐色粘土質シルトなどである。

遺物は、第1層中より土師器环片・甕片、須恵器环片・甕片が少量出土している。また底面直上層より土師器环片・甕片が数点出土した。そのうち、内外面黒色処理された土師器环片が1点含まれている。



SK1567 (a-a')			
部位	土色	土性	備考
1	16YR4/4 褐色	熱土質シルト	灰白色シルトと黄褐色シルトを含む。
2 a	16YR3/4 黄褐色	粘土質シルト	灰白色土を少量含む。
2 b	16YR4/3 AC-IV 黄褐色	粘土質シルト	灰白色土を少量含む。
2 c	16YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	2a層より化石化を多く含む。
2 d	16YR3/2 黄褐色	シルト質粘土	灰白色土を少量含む。
2 e	16YR4/4 褐色	粘土質シルト	云母化粘土質シルトを含む。
2 f	16YR3/4 黄褐色	粘土質シルト	明黄色土と黄褐色土を含む。
3	16YR4/2 黄褐色	粘土質シルト	明黄色シルトを含む。
3 a	16YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	粘土質シルトを含む。
3 b	16YR4/4 黄褐色	シルト質粘土	褐色化を少量含む。
3 c	16YR2/4 黄褐色	粘土質シルト	褐色化粘土質シルトを含む。
3 d	16YR4/4 黄褐色	シルト質粘土	褐色化粘土質シルトを含む。
4 a	16YR6/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	灰白色シルト質粘土を多量に含む。
4 b	16YR5/6 黄褐色	シルト質粘土	褐色化粘土質シルトを部分的に含む。
SK1568 (b-b')			
1	16YR3/2 黄褐色	シルト	黄褐色シルトを全体に含む。

第27図 S K1567・1568土坑断面図

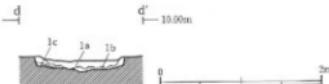
SK1568 土坑 長軸2.20m、短軸1.54mの不整の楕円形を呈する土坑で、深さは10~18cmである。底面はほぼ平坦であるが、中央部が高く、壁の周囲がわずかに落ち込んでいる。壁は北側ではほぼ垂直に立ち上がるが、東西部分では緩やかである。堆積土は、黒褐色シルトである。

遺物は、土師器坏片・甕片、須恵器坏片・甕片が少量出土している。

SB1595A・B 挖立柱建物跡を切っている。

SK1573 土坑 長軸1.11m、短軸0.58mの開丸長方形を呈する土坑で、深さは18cmである。底面はやや凹凸があり、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は、にぶい黄褐色粘土質シルト、褐色粘土質シルトなどで、第1a層中には灰白色火山灰を含んでいる。

遺物は、土師器坏片・甕片、須恵器坏片が少量出土している。



層位	土 色	土 性	標 號
1 a	19YR4/3 にひい黄褐色	粘土質シルト	灰白色火山灰、地土・炭化物を含む。
1 b	19YR5/4 にひい黄褐色	粘土質シルト	粘土質シルトを多量に含む。
1 c	19YR4/4 ぬ も	粘土質シルト	黄褐色粘土質シルトを含む。

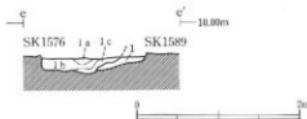
第28図 S K 1573 土坑断面図

SB1560 挖立柱建物跡を切っている。

SK1576 土坑 長軸1.02m、短軸0.42mの不整の楕円形を呈する土坑で、深さは17~22cmである。底面は検出面から16cm程で平坦となるが、さらに緩やかに落ち込んでいる。壁は西側ではほぼ垂直に立ち上がるが、東側は緩やかに立ち上がる。堆積土は黒褐色粘土質シルト、にぶい黄褐色粘土、黒褐色粘土である。遺物は出土しなかった。

SB1595A 挖立柱建物跡、**SK1589** 土坑を切っている。

SK1589 土坑 長軸0.82m以上、短軸0.54mの不整形の土坑で、深さは20cmである。壁は緩やかに底面に向かって落ち込んでいくが、底面の状況は、重複により不明である。堆積土は、にぶい黄褐色粘土質シルトである。遺物は出土しなかった。



層位	土 色	土 性	標 號
1 a	19YR3/2 黑褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色粘土質シルトを含む。
1 b	19YR3/3 にひい黄褐色	粘土質シルト	にひい黄褐色粘土を多量に含む。
1 c	19YR2/2 黑褐色	粘土質シルト	にひい黄褐色粘土を含む。
SK1589 (e-e')			
1	19YR5/4 にひい黄褐色	粘土質シルト	褐色粘土質シルトをまばらに含む。

第29図 S K 1576・1589 土坑断面図

SK1576 土坑 に切られている。

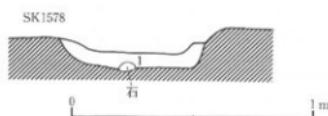
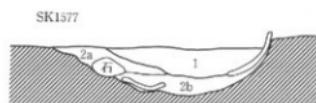
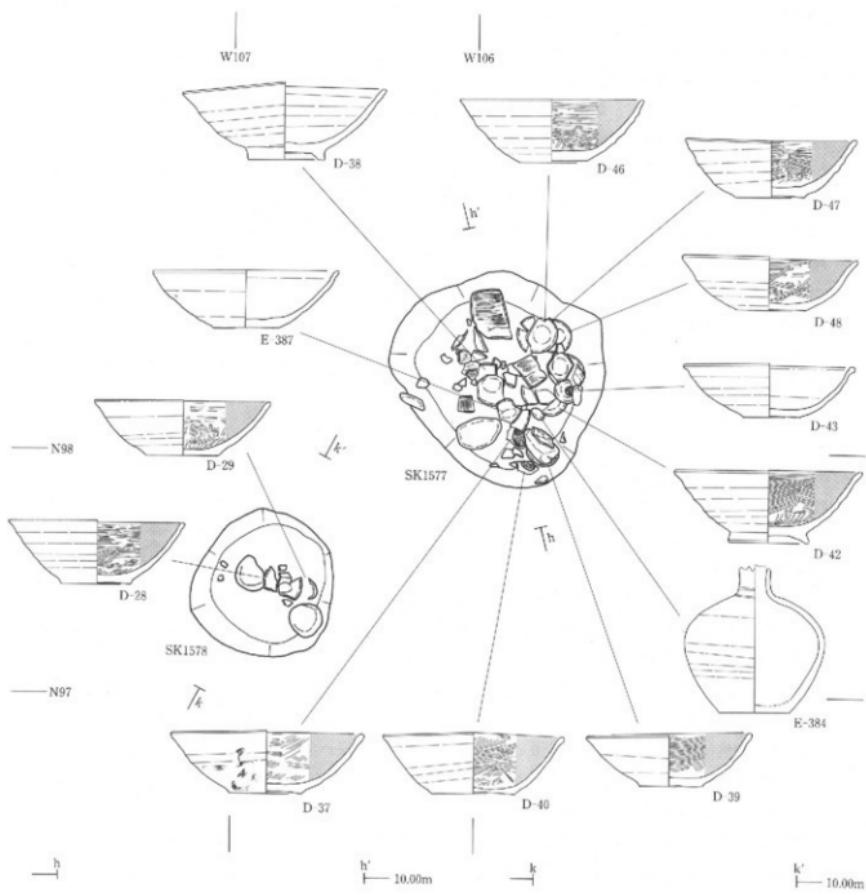
SK1577 土坑 長軸0.88m、短軸0.82mの不整の円形を呈する土坑で、深さは20cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は、中央部が緩やかにくぼむがほぼ平坦である。堆積土は、褐色砂質シルト、黒褐色シルト、暗褐色粘土質シルトで、第1層には、灰白色火山灰をまばらに含んでいる。

遺物は、ロクロ土師器 D-36 坯 (第31図1・図版29-16)、D-37 坯 (第31図2・図版30-1)、D-39 坯 (第31図3・図版29-17)、D-40 坯 (第31図4・図版29-18)、D-42 高台付坯 (第31図9・図版29-20)、D-45 坯 (第31図5・図版29-21)、D-46 坯 (第31図6・図版29-22)、スヌの付着した D-47 坯 (第31図7・図版29-23)、D-48 坯 (第31図8・図版30-3)、D-44 罐 (第32図1・図版29-13) 以上10点、赤焼き土器 D-35 高台付坯、D-38 高台付坯 (第31図12・図版29-15)、スヌの付着した D-43 坯 (第31図11・図版30-2) 以上3点、須恵器 E-384 長頸壺 (第32図2・図版30-4)、E-387 (第31図10・図版29-19) 以上2点、計15点の他、土師器坏片・甕片、赤焼き土器坏片が出土した。これらの遺物は、ほとんどが底面直上層及び底面から出土している。

SB1560・1570 挖立柱建物跡を切っている。

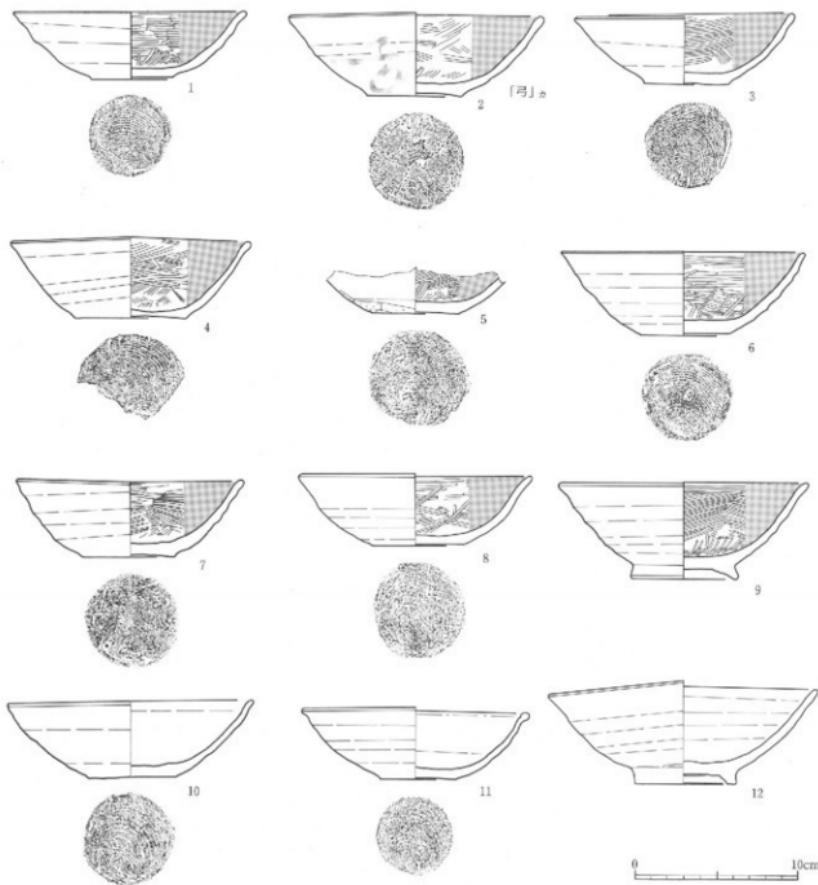
SK1578 土坑 直径58cmのほぼ円形の土坑で、深さは12cmである。底面は平坦で、壁は底面から緩やかに立ち上がる。立面形状はほぼ半球形である。堆積土は暗褐色粘土質シルトで、焼土・炭化物を含んでいる。

遺物は、ロクロ土師器 D-28 坯 (第32図3・図版30-5)、D-29 坯 (第32図4・図版30-6) の他、ロクロ土師器坏片・甕片が2点出土している。SB1570 挖立柱建物跡を切っている。



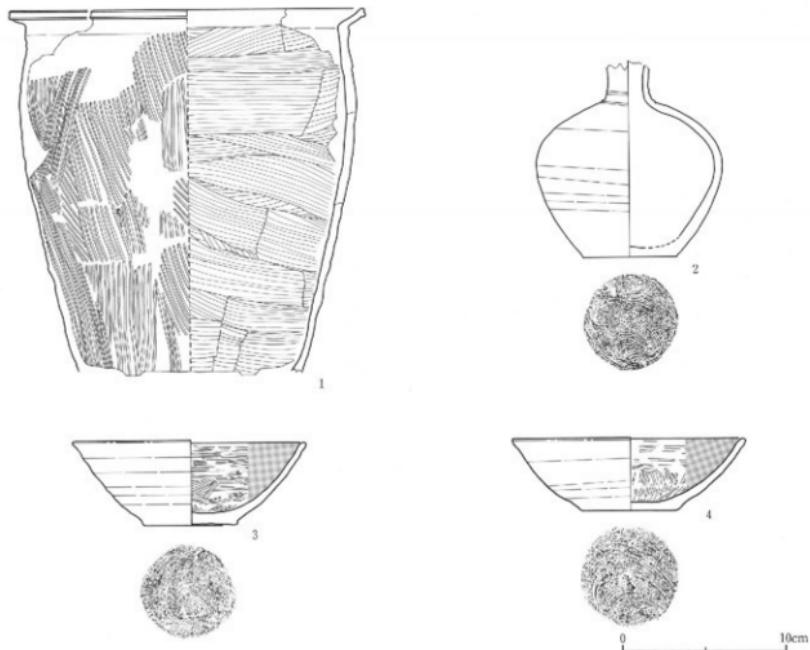
SK1577 (h-h')		SK1578 (k-k')	
層位	土色	土性	備考
1	10YR4/4 細色	砂質シルト	灰白色火成岩を含む。礫土・炭化物を含む。
2 a	10YR3/2 黑褐色	シルト	燒土粒・炭化物を多く含む。
2 b	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	燒土・炭化物を多量に含む。
SK1578 (k-k')			
1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	燒土粒・炭化物を少量含む。

第30図 S K 1577・1578土坑平・断面図 (1/20)



图版 番号	骨器番号	器 形	出 土 地 点		規 格 (cm)		外 装 飾 横		内 装 飾 横		色 彩		考 参	等 価 図版
			出土遺物	位置	高 度	口 径	底 径	口縁	脚	底	口縫	体壁	底盤	
1	D-36	土器部・环	SK1577	高脚盆上	4.2	14.3	5.9	ロクロナ	回転赤切9	レ	オ	+	2.5VR7/3 暗青色	褐色AN3
2	D-37	土器部・环	SK1577	高脚盆上	5.1	15.6	5.9	ロクロナ	回転赤切9	レ	オ	+	7.5VR7/4 暗青色	7.5VR5/5 暗青色
3	D-38	土器部・环	SK1577	浅盆	4.1	13.6	5.2	ロクロナ	回転赤切9	レ	オ	+	10YR4/3 黄褐色	10YR4/3 黄褐色
4	D-40	土器部・环	SK1577	高脚盆上	3.0	14.0	6.0	ロクロナ	回転赤切9	レ	オ	+	7.5VR7/4 暗青色	褐色AN3
5	D-45	土器部・环	SK1577	高脚盆上	(2.8)	-	5.4	ロクロナ	回転赤切9	レ	オ	+	10YR5/2 暗白色	褐色AN3
6	D-46	土器部・环	SK1577	浅盆上	3.2	15.1	5.5	ロクロナ	回転赤切9	レ	オ	+	2.5VR5/3 黄褐色	褐色AN3
7	D-47	土器部・环	SK1577	高脚盆上	4.8	14.0	5.7	ロクロナ	回転赤切9	レ	オ	+	3YR5/2 暗褐色	7.5VR7/4 暗青色
8	D-48	土器部・环	SK1577	浅盆	4.5	14.4	5.5	ロクロナ	回転赤切9	レ	オ	+	7.5VR7/4 暗青色	褐色AN3
9	D-49	土器部・西付耳	SK1577	低脚盆上	5.9	13.5	6.5	ロクロナ	付耳横	レ	オ	+	2.5VR5/3 黄褐色	褐色AN3
10	E-382	新器部・环	SK1577	底面	4.7	13.2	5.3	ロクロナ	回転赤切9	ロ	オ	テ	3YR5/2 暗褐色 10YR7/3 暗褐色	7.5VR6/2 暗白色 10YR4/1 暗褐色
11	D-43	赤褐色土器・环	SK1577	低脚盆上	4.4	14.0	4.7	ロクロナ	回転赤切9	ロ	オ	テ	3YR5/2 暗褐色 10YR7/3 暗褐色	7.5VR7/4 暗青色 10YR5/2 暗白色
12	D-38	赤褐色土器・高付耳	SK1577	底面	4.3	16.6	6.3	ロクロナ	回転赤切9	ロ	オ	テ	3YR5/4 暗青色 10YR7/4 暗青色	褐色AN3

第31図 S K 1577土坑出土遺物（1）



図版番号	遺物番号	種別・器形	出土場所・地点	高さ (cm)	外観調査			内観調査			備考	写真回数
					断面	口幅	口径	口縁部	全体部	底部		
1	D-44	土師器・壺	SK-1577 壁面以上	22.5	(22.5)~	(22.4)	ロクロナデ ロハゲメ	ロクロナデ	ロクロナデ →ヘラナデ	ロクロナデ		29-13
2	E-284	須恵器-壺型	SK-1577 窓面	12.1	5.8	5.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		30-4
3	D-38	土師器・壺	SK-1578 底面	5.2	14.8	5.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	30-5
4	D-29	土師器・壺	SK-1578 底面	4.5	14.2	6.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	30-6

第32図 S K 1577・1578土坑出土遺物（2）

SK1581 土坑 長軸0.80m、短軸0.70mの不整の楕円形を呈する土坑で、深さは20~24cmである。底面はほぼ平坦で、壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は、暗褐色粘土質シルト、褐色シルト質粘土である。

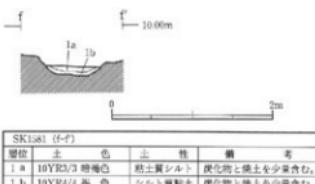
堆積土中より、スサ入り粘土塊が5点出土している。

SB1570 捩立柱建物跡を切っている。

SK1582 土坑 長軸0.77m、短軸0.61mの不整の楕円形を呈する土坑で、深さは8~10cmである。底面は平坦で、壁は西側ではほぼ垂直に立ち上がるが、東側では緩やかに立ち上がっている。堆積土は、褐色粘土質シルトである。

遺物は、土師器坏片、須恵器坏片、高台付坏片が3点出土した。

SB1570 捩立柱建物跡を切っている。



第33図 S K 1581土坑断面図

層位	土色	土性	備考	SK1581 (f-f')
				1 a 10YR3/3 暗褐色 1 b 10YR4/4 楔色
				粘土質シルト シルト質粘土
				灰化物と焼土を少含む。 灰化物と焼土を少含む。

SK1583 土坑 長軸0.82m、短軸0.68m のほぼ円形の土坑で、深さは23cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は、褐色粘土質シルト、黄褐色粘土質シルトである。

遺物は、土師器壺片、須恵器壺片が2点出土した。

SK1584 土坑 長軸1.10m、短軸0.82m の不整の楕円形を呈する土坑で、深さは22cmである。底面は平坦で、壁は東側がほぼ垂直に立ち上がる他は緩やかである。堆積土は、黒褐色粘土質シルト、にぶい黄褐色粘土質シルトである。

遺物は、土師器壺の体部片が3点出土した。

SK1586 土坑 直径88cm、深さ22cm程の土坑であるが、調査区外に延びるため平面形は不明である。底面は凹凸があり、壁は底面から緩やかに直線的に立ち上がる。堆積土は暗褐色粘土質シルト、黄褐色粘土質シルトである。

遺物は、土師器壺の体部片が1点のみ出土した。

SK1587 土坑 長軸1.28m、短軸0.68m の楕円形の土坑で、深さは36cmである。底面はやや凹凸があり、壁は緩やかに丸みを帯びながら立ち上がる。堆積土は、黄褐色粘土質シルトである。

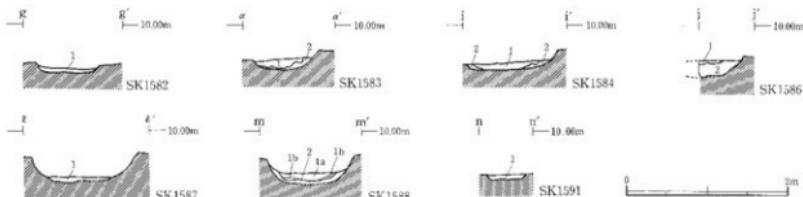
遺物は、ロクロ土師器壺片、須恵器壺片が数点出土した。

SK1588 土坑 長軸1.08m、短軸0.72m の不整の楕円形を呈する土坑で、深さは26~35cmである。底面は平坦で、壁はやや丸みを帯びながら緩やかに立ち上がる。堆積土は、黒褐色粘土質シルト、暗褐色粘土質シルト、にぶい黄褐色粘土質シルトである。

遺物は、土師器壺片・甕片、須恵器壺片が少量出土した。

SK1591 土坑 長軸1.14m、短軸0.52m の不整の楕円形を呈する土坑で、深さは4~6cmである。底面は凹凸がある。ほぼ底面まで削平されており、壁がわずかに立ち上がるのみである。堆積土は、黄褐色粘土質シルトで、灰白色火山灰を含んでいる。遺物は出土しなかった。

SD1592 滅跡を切っている。



SK1582 (g' g')			
層位	土色	土性	備考
1 10YR4/4 暗褐色	粘土質シルト	黄褐色土をまばらに含む。	
SK1583 (a' a')			
1 10YR4/4 暗褐色	粘土質シルト	黄褐色土を少量含む。	
2 10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト		
SK1584 (i' i')			
1 10YR4/2 黑褐色	粘土質シルト	にぶい黑褐色土を少量含む。	
2 10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色土を少量含む。	
SK1586 (j' j')			
1 10YR4/2 黑褐色	粘土質シルト	にぶい黒褐色土を少量含む。	
2 10YR4/6 にぶい黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色土を少量含む。	
SK1587 (j'-j')			
1 10YR4/6 黄褐色	粘土質シルト	明褐色土をまばらに含む。炭化物を一部に含む。	
2 10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	斑褐色土を多量に含む。	

SK1587 (j'-j')			
層位	土色	土性	備考
1 10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト		
SK1588 (m' m')			
1 a 10YR2/3 黑褐色	粘土質シルト	黄褐色土を少量含む。	
1 b 10YR2/1 黑褐色	粘土質シルト	にぶい黑褐色土を多量に含む。	
2 10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄をまばらに含む。	
SK1591 (n'-n')			
1 10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	灰白色火山灰を少量含む。	

第34図 S K 1582・1583・1584・1586・1587・1588・1591土坑断面図

SK1596 土坑 損壊により詳細は不明であるが、長軸0.92m以上、短軸0.78mの不整の楕円形を呈する土坑で、深さは40cm程である。底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がるが一定していない。堆積土は、暗褐色シルト、にぶい黄褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

SK1599 土坑 長軸1.12m、短軸1.02mの不整の円形を呈する土坑で、深さは30cm程度である。底面はほぼ平坦で、壁は底面から10cm程のところで軽い段がつき緩やかに立ち上がる。堆積土は、褐色シルトである。

遺物は、土師器壺の体部片が1点のみ出土した。

SK1602 土坑 長軸0.90m、短軸0.73mの方形の土坑で、深さは13cm程度である。底面は平坦であるが、壁面の周囲がわずかにくぼみ、中央部がやや膨らんでいる。壁は、底面から垂直に立ち上がる。堆積土は、褐色シルトである。SD1569C溝跡を挟んで西側に、ほぼ同規模・同形状のSK1603土坑が位置している。遺物は出土しなかった。

SA1620 板塀跡、SB1610 挖立柱建物跡、SD1593溝跡を切っている。

SK1603 土坑 長軸0.81m、短軸0.59mの方形の土坑で、深さは10~13cm程度である。底面はほぼ平坦で、壁は底面から垂直に立ち上がる。堆積土は、褐色シルト、灰黃褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

SD1569D溝跡を切っている。



第35図 SK1596・1599・1602・1603土坑断面図

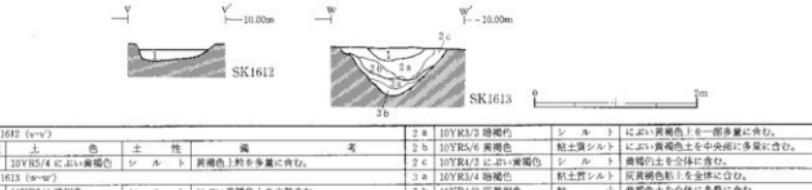
SK1608 土坑 長軸1.37m、短軸0.92mの不整の楕円形を呈する土坑で、深さは26~30cm程度である。断面逆台形で底面は平坦である。壁は、底面から外傾しながら立ち上がる。堆積土は、暗褐色シルトである。

遺物は、須恵器壺の体部片が1点出土したのみである。

SD1611 溝跡を切っている。

SK1612 土坑 長軸0.94m、短軸0.85mの楕丸方形の土坑で、深さは16~18cmである。底面はほぼ平坦であるが立ち木の根による搅乱で一部乱れる箇所がある。壁は、北側ではほぼ垂直に立ち上がるが、南側は緩やかである。堆積土は、にぶい黄褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

SK1613 土坑 長軸1.32m、短軸1.06mの楕円形の土坑で、深さは57cmである。立面形状は描り鉢形で、壁は底面からV字形に立ち上がる。堆積土は、暗褐色シルト、黄褐色粘土質シルト、にぶい黄褐色シルトなどである。遺物は出土しなかった。SB1625 挖立柱建物跡、SD1569C溝跡を切っている。



第36図 SK1608土坑断面図

SK1612 (v-v')

SK1613 (w-w')

SK1612 (v-v')

SK1613 (w-w')

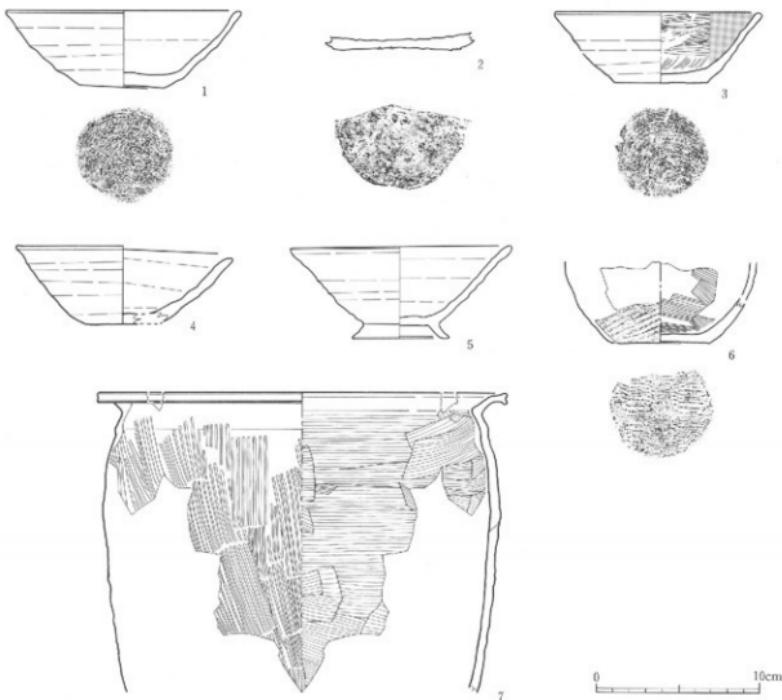
SK1612 (v-v')

SK1613 (w-w')

SK1612 (v-v')

SK1613 (w-w')

第37図 SK1612・1613土坑断面図

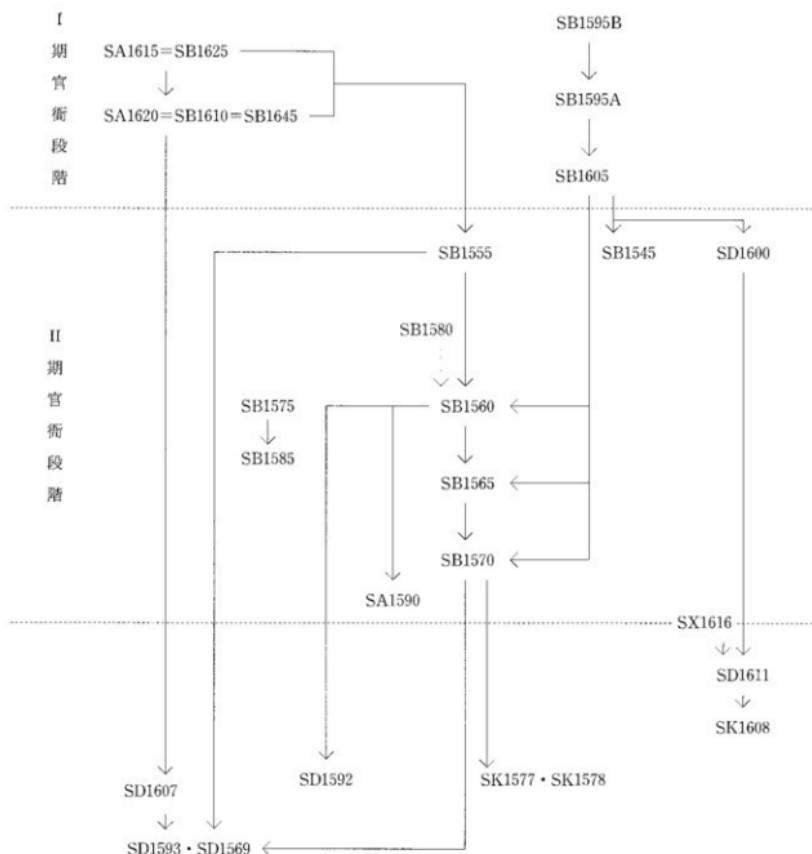


番号	目録 番号	種別	器形	出土遺物	法 量(cm)	外 面 圖 形	内 面 圖 形	性 質	備 考	写真図版
1	E-383	灰	瓦	片	4.7	16.6 □便 底径	ロクロナデ	斜面 底 直 切	ロクロナデ ロクロナデ	2/2残存 31-8
2	E-382	灰	瓦	片		6.0		斜面 底 直 切	ロクロナデ	へ9残存 31-9
3	D-33	土	瓦	片	4.4	12.8 表 土 中	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ 底 直 切	1/2残存 31-2
4	D-31	赤燒き	土	瓦	4.8	13.3 底 直 切	ロクロナデ	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ ロクロナデ	3/4残存 31-4
5	D-32	赤燒き	土	瓦	5.6	13.5 底 直 切	ロクロナデ	ロクロナデ 底 直 切	ロクロナデ ロクロナデ	ほぼ完形 31-5
6	C-724	土	瓦	片		6.6	タキオ ロ ハメ	ムシロ模 ヘラカズリ	ヘラカズリ ヘラカズリ	31-3
7	D-34	土	瓦	片	25.3	表 土 中	ロクロナデ	ロクロナデ 底 ハメ	ロクロナデ 底 ハメ	32-2

第38図 その他の出土遺物

3. まとめ

発見された遺構は、一本柱列1列、板塀跡1条、掘立柱建物跡15棟、溝跡17条、土坑22基、性格不明遺構1基などその他、多数の小柱穴・ピットなどである。主な遺構の重複関係を整理すれば次のとおりである。(並列関係は、必ずしも遺構の同時性を示すものではない。)



(1)II期官衛の遺構群……SD1600石組溝跡・SB1545・1555・1560・

1565・1570・1580・1585掘立柱建物跡・SA1590柱列

これらの遺構のうち、基準方向の明確なものを整理すると次のようになる。

A群：SD1600 (N-1°-E) SB1545 (N-0°-S) SB1555 (W-0°-E)

B群：SB1560 (E-6°-N) SB1570 (E-6°-N) SB1575 (E-14°-N)



第39図 第107次調査区 II期官衙段階主要遺構配置図 (1/200)

今回の調査で検出したII期官衙段階の遺構は、方向性の違いから2つに分けて考えるこができる。A群は、造営基準方向が真北を示す遺構であり、B群は、造営基準方向が真北から西に振れた方向を示すものである。

SD1600石組溝跡は、SA730一本柱列の推定検出位置より東に8.4m程の地点で検出された。石組溝跡は底面直上まで近年の耕作により擾乱されており、底面の石敷きのみが辛うじて残存した状況で検出されている。水性堆積による土層などは確認できなかった。特に調査区北側では、底面の残存状況は良好ではない。しかし底面の残存状況の良好な部分では、直径12~15cm程の偏平な河原石を敷き始めた状況が観察される。また一部ではあるが、底面石敷きの東辺端部で石を立てて掘えている箇所があり、8~10cm程側壁としての立ち上がりが認められる。本遺跡内においてこのような石組の遺構としては、第83次調査で検出された石組池跡や石組溝跡があり、政庁域内において極めて重要な役割を果たしていた施設と考えられている(註1)。このSD1600石組溝跡は、II期官衙政庁域の推定西辺付近に位置していることから、政庁域西辺区画施設の一部と考えられる。

SB1555掘立柱建物跡は、梁行2間×桁行3間以上の東西棟の建物跡である。柱間寸法が288~300cm、柱穴掘り方の一辺が140cm以上あり、大型の建物跡と考えられる。またこの建物跡は東柱を有しており、本遺跡においては、第77次調査で検出したSB1210掘立柱建物跡に次いで2列目の検出となる。SB1555は全容は不明であるが、政庁域内の建物の中でも主要な建物とみておきたい。またこの建物跡の柱痕跡及び抜き取り穴には焼土が多量に含まれ、掘り方には焼土は全く含まれないことから火災に遭っているものと考えられる。

SB1545掘立柱建物跡も同様に真北を基準としている。この建物跡も柱穴掘り方には焼土が全く含まれないが、柱痕跡にはわずかに焼土が含まれていることから、火災に遭っていると考えられる。これら真北を基準とする遺構は、配置関係や火災に遭っているという点から、同時に存在した可能性が高いと考えられる。

SB1560・1570掘立柱建物跡は、真北から西に振れた方向を基準としているが、真北方向のSB1555掘立柱建物跡より新しいことは明確である。また柱穴掘り方には焼土が多量に含まれており、火災後の建築であると考えられる。この火災後に建てられた建物跡は全て真北から西に偏していることから、大きくA群からB群(A期→B期)への変遷が考えられる。SB1560掘立柱建物跡は、東西に廂をもち、身舎中央に東柱がある。またSB1570掘立柱建物跡は、梁行3間×桁行5間の南北棟の建物跡である。両建物跡とも柱筋の状況や掘り方規模・形状にはばらつきがあるなどの点で、真北を基準とする建物跡とは違いがみられる。また西に振れたB期の建物跡は、調査区の南端で別の建物跡とも重複関係があることから、B期の中でさらに複数時期の変遷が考えられる。

遺物は、SD1600石組溝跡底面よりG-70平瓦片、SB1555掘立柱建物跡柱穴掘り方よりG-71平瓦片が出土している。どちらも凹面には細かい布目痕、凸面には格子叩きの痕跡が観察され、色調が橙色を呈している。胎土・焼成とも近似している。これら瓦片は、II期官衙A期の遺構である真北基準の溝跡底面や柱穴掘り方から出土している。よって瓦使用の建物の造営がII期官衙の造営以前に遡る可能性も考えられる。

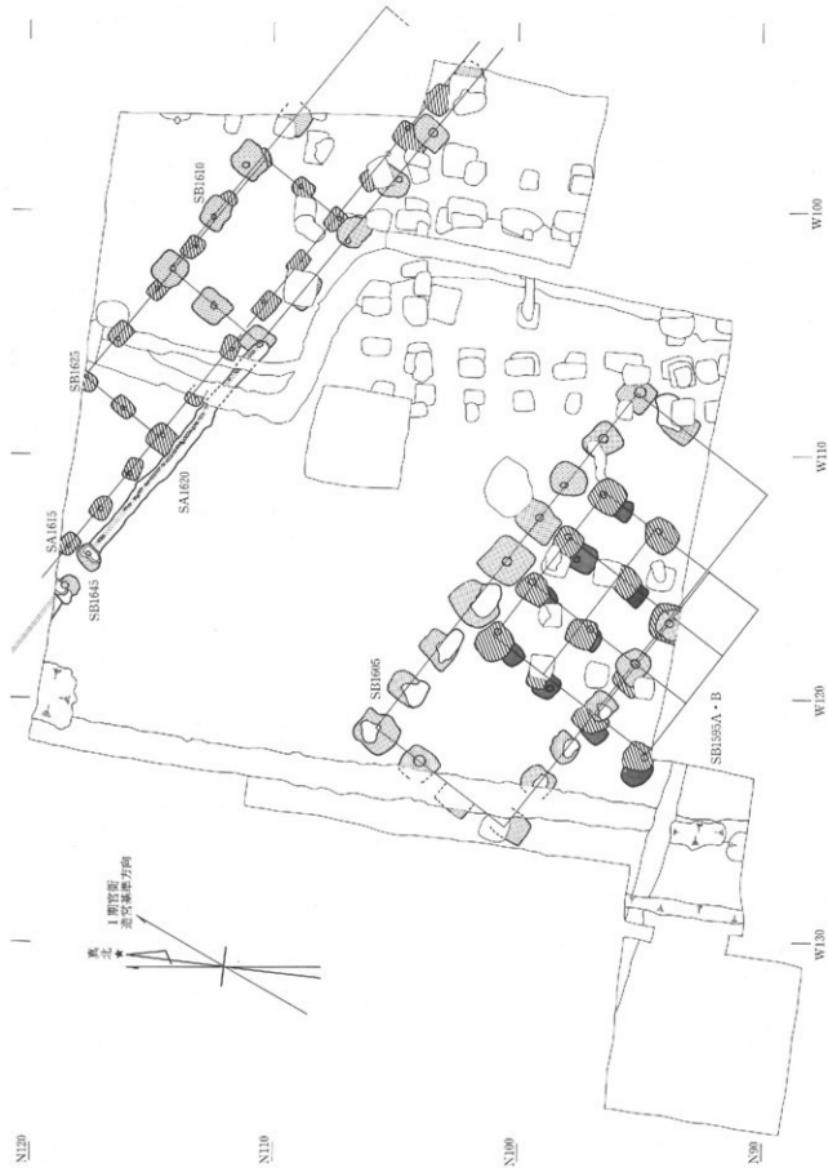
今回の調査は、II期官衙政庁域の遺構の様相を明らかにするとともに、これまで政庁の西辺区画施設と考えていたSA730一本柱列が本調査区まで延びるか否かを確認することを目的として実施した。しかし本調査区内においては、SA730一本柱列は検出されなかったことから、途中で途切れているか建物跡の一部になる可能性が考えられる。またこの一本柱列は、N-5°-Wを基準としており、II期官衙政庁の遺構変遷ではB期に属するものとみられる。

(2) I期官衙の遺構群……SA1615一本柱列・SA1620板塀跡・SB1625・

1620・1595A・B・1605掘立柱建物跡・SB1645門跡

これらの遺構は、全てE-31°-S方向を基準としている。直接的な重複関係からは3回の変遷がみられる。

SA1615一本柱列とSB1625掘立柱建物跡は、建物跡のN 3 W 1 柱穴とN 3 W 6 柱穴で一本柱列と接続し、一本柱列と建物の南桁行が一直線上に揃っている。一本柱列と建物跡との重複関係は認められない。またSB1645門跡・SA1620板塀跡・SB1610掘立柱建物跡の状況も同様で、建物跡のN 3 W 1 柱穴で板塀跡と接続し、板塀が北西方向に延



第40図 第107次調査区 1期官衙段階主要遺構配置図 (1/200)

び、途切れた地点で門跡が検出されている。遺構の様相から、構築手順としては、先に門や建物を建てた後、両者間を板塀でつなぐという手順を取っている。また重複関係から板塀跡は一本柱列より新しく、区画施設に2時期の変遷が認められる。これらの遺構は、建物跡と塀跡とが一体となって官衙ブロックを遮蔽していたと考えられる。

またSB1595A・B掘立柱建物跡は3間×3間の純柱建物跡で、このような建物跡は官衙内において倉庫と考えられている。この建物跡は同位置でやや規模を大きくして建て替えられている。その後、さらにはほぼ同位置にSB1605掘立柱建物跡が造営される。この建物跡は、梁行3間×桁行8間の長大な建物跡で、同様の建物跡には第77次調査で検出されたSB14・1100建物跡などがあり、官衙中枢の一画を形成する建物と考えられている(註2)。今回検出されたSB1605建物跡はSB1100建物跡より梁行で1間小さく、桁行は8間で同様であるが、総長では0.6m程大きくなっています。建物床面積はほぼ同規模となる。よってこの建物についても官衙中枢建物のひとつとみておきたい。

建物跡と塀跡による区画施設と、その南に位置するSB1595A・B及び1605建物跡は、重複関係がないことから、各遺構間の先後関係を明らかにすることは難しい。また区画施設が一本柱による塀から板塀への建て替えの時期と、SB1595A・Bの建て替えの時期が一致するかどうかなどについても不明である。

(3)SX1616出土遺物について

SD1600石組溝跡の東側から、SX1616A・B・Cが検出されている。このSX1616A・B・Cは、土坑が3基連結したような形状で総長では南北に7.6mと長く、SD1600石組溝跡と平行している(第18回参照)。重複は認められない。出土した遺物は、ロクロ使用の土師器片は含まれておらず、須恵器E-380高台付壺、E-377高台付皿、E-378・379壺、G-68・69平瓦、土師器C-773壺、円面鏡などがある。各々の遺物について若干の検討を加えておきたい。

G-68平瓦は凹面に模骨痕が頗著で、凸面は繩叩き後ナデが施されている。この瓦の特徴はII期官衙の付属寺院である郡山庵寺の平瓦と同じ特徴を示している。

須恵器E-378・379壺は、底部から口縁部にかけて直線的に外傾しており、底部切り離し技法は明瞭でなく、回転ヘラケズリの後手持ちヘラケズリが施された平底の壺である。このような特徴を示す須恵器壺は、これまでの郡山遺跡の調査で出土した丸底風で体部中に屈曲や段のあるもの、あるいは平底でも口径が小さいものなどとはやや違いが見られる。類似した特徴を有するものは陸奥国多賀城の創建期の瓦を焼成した三本木町下伊場野窯跡群や田尻町木戸窯跡群、色麻町の日の出山窯跡群などから出土したものに見られ、日の出山窯跡A地点の7号窯跡から出土したものに最も類似している。木戸窯跡のものは器高が低く、下伊場野のものは口径がやや小さいものが多い。

須恵器E-380高台付壺もE-378・379壺のように、底部から口縁部にかけて直線的に外傾しており、さらに、器高が高く、これまでの郡山遺跡の調査で出土したものとはやや異なっている。類似のものは前述の木戸窯跡群の第4号窯跡や日の出山窯跡群のなかのA地点6号窯跡に見られる。

須恵器E-377高台付皿は体部に棱を持ち、棱から上は短く立ち上がる。これは利府町観沢窯跡群のB3号窯跡の中の高台付きの盤(IA4類)としたものに類似し、前述した下伊場野窯跡や日の出山窯跡で報告されたものの中には見られないものである。

このように見てくると須恵器からは多賀城創建期でも日の出山窯跡のA地点6、7号窯跡から観沢窯跡のB3号窯跡の時期の間ということができよう。したがってこれらの遺物については8世紀の前半代でも多賀城創建期以降の年代を与えることができよう。

出土遺物の検討からSX1616A・B・Cの年代は、8世紀前半代でも多賀城創建期以降と考えられる。SD1600石組溝跡はII期官衙の中でも真北方向を基準としたA期に属する遺構であり、重複関係は確認できないが、出土遺物の検討からはSD1600石組溝跡の方が先行する。SX1616が掘り込まれた時は、石組溝跡が地表に残存していたために重複せず掘り込まれたものと考えられる。しかしこれまでの検討では、II期官衙の廃絶年代は8世紀初頭と考えられてきた。SX1616が掘り込まれた時期のII期官衙域内の様相については、官衙の廃絶年代の詳細を含め、新たな遺構、遺物の発見を待つて検討しておきたい。

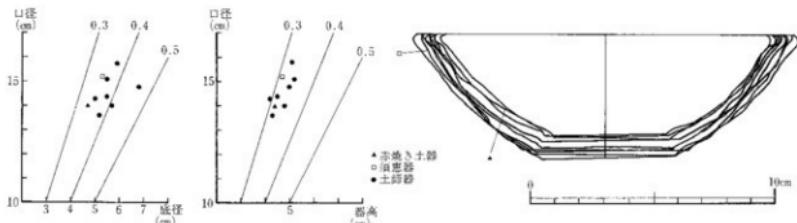
(4)SK1577土坑出土遺物について

SK1577土坑から出土した壺類について若干検討してみたい。この土坑からは、内面黒色処理された土師器壺7点（うち1点に墨書きが認められる（註3））・高台付壺1点、赤焼き土器壺1点・高台付壺1点、須恵器壺1点などが出土している。これらはすべて製作にロクロを使用している。およよその特徴をまとめてみると次のような点が挙げられる。第1に、土師器・須恵器・赤焼き土器によって構成されていること、第2に、赤焼き土器には壺と高台付壺がみられるが、口径10cm前後の小型のものを含まないこと、第3に、体部下端に手持ちヘラケズリ再調整されるものが1点含まれるのみで、底部切り離し技法が回転糸切り無調整であること、などである。このような特徴は、多賀城跡出土土器群のうちE群土器に位置付けられているものに認められる（註4）。

第41図は、壺の底径と口径（以下「底口比」と略す。）および器高と口径（以下「高口比」と略す。）の関係、また壺のプロフィールを示した図である。土師器は、口径が13.6～15.8cmで、14cm台のものが多い。底口比は、0.35～0.45で、高口比は、0.31～0.34でほぼまとまっている。また、器形は、底部からやや内寄りに立ち上がり、口縁部が外傾している。赤焼き土器は、口径が14cmで、底口比0.34、高口比0.31である。器形は、底部から内寄りに立ち上がり、口縁部がやや外反している。今回出土した土器の中では比較的口径が小さい。須恵器は、口径15.2cmで底口比0.35、高口比0.31である。器形は、底部から内寄りに立ち上がり、口縁部がわずかに外傾する。このように、土師器・須恵器・赤焼き土器とも、底口比・高口比ではある程度まとまっており、形態的には近似していると考えられる。しかし、土師器の中で口径が15cm台のやや大型のものと13cm台の比較的小型のものがあり、分化していく傾向が読み取れる。

最近の編年案によれば、E群土器に位置付けられているものには、高崎遺跡井戸尻地区土器群がある（註5）。これについては、灰白色火山灰降下前後の年代が与えられている（註6）。また今回出土した遺物の中に、楕型に近い高台付壺（D-38・42）がある。このような高台付壺の出土は、多賀城跡F群土器に位置付けられている第61次調査鴻ノ池地区第7層出土土器群において顕著になるという（註7）。この土器群については、10世紀中葉頃に比定されている。しかし、SK1577土坑出土土器群には、赤焼き土器小皿が含まれないことから、SK1577土坑出土土器群の年代は、10世紀前半でも灰白色火山灰降下後であるとみておきたい。

また、今回出土した須恵器E-387壺は、一般的な須恵器のように青灰色のものではない。E-387壺は色調が灰白色を呈し、軽く、やや軟質な印象を受けるものである。このような灰白色の土器については、蒸沢遺跡（註8）、安久東遺跡（註9）、鴻ノ池遺跡（註10）などからも出土しており、一般的な須恵器と器形や法量などの点で違いが指摘されてきている（註11）。今回の調査ではSK1577土坑から1点と、遺構検出面から1点（E-383（第38図・図版31-8））出土したのみで詳細な検討は行えないため、特徴のみ記載する。第1に、E-387・383とも色調が灰白色を呈していること。第2に、口縁部や体部の内外面に黒斑のように黒くなっている部分が認められること。第3に、内面の器面調整において、ロクロ目の凹凸は見られず全体的に滑らかなことである（註12）。このような土器については、今後の資料の増加を待って検討をしていきたい。



第41図 壺類の口径と底径・口径と器高・プロフィール図

IV 第108次発掘調査

1. 調査経過

第108次調査は、仙台市青葉区上杉 2 丁目 1-14 セルコホーム株式会社新本恭弘氏より、太白区郡山 2 丁目 68-2 において、共同住宅の新築に伴い発掘届が平成 7 年 7 月 25 日付けで提出されたため実施した。建築計画では木造 2 階建の共同住宅で、基礎部分の掘削も表土上面より 45cm と浅く、遺構を損なう可能性は低かった。しかし第99次、第103次調査の結果から I 期官衙の西辺を区画する溝跡や木材列が通過する可能性があったため、遺構を確認する目的で調査を実施した。現状ではこの地点より以北では住宅が密集しており、I 期官衙西辺の北への延びを確認することは困難である。したがって年度当初の計画にはなかったが緊急に計画・準備され、平成 7 年 8 月 1 日から 8 月 4 日にかけて 2 × 20m の調査区を設定して行った。

2. 発見遺構・出土遺物

発掘調査の結果、宅地化する際の盛土が厚く 2 m 程盛られていた。盛土の下で旧水田の耕作土を検出し、さらにその直下でピット 2 基を発見した。遺物が出土しなかつたためピットの時期は明らかではない。

3. まとめ

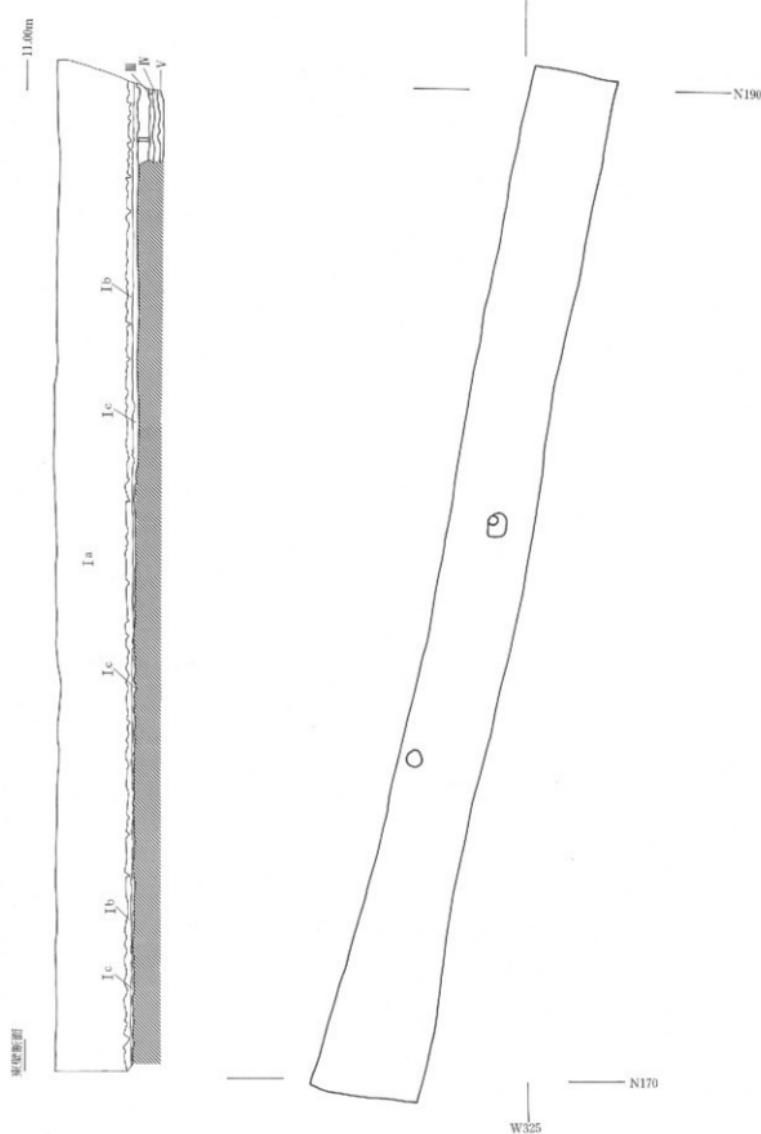
遺構を検出した土層を見ると、これまでの調査で古代の遺構が検出された層より下層の層であり、上部が著しく削平されていることが考えられる。郡山遺跡の西北部は大正末年から昭和 30 年頃にかけて、レンガを生産していた工場が近くにあり、それにより削平された可能性がある。当初推定した I 期官衙に関わる遺構は、そのために発見されなかつた。



第42図 第108次調査区位置図

選定	土色	土性	保	考
I a	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色粘土質シルトを中心部に含む、宅地造成のための盛土と考えられる。	
I b	10YR3/1 漆黒色	粘	セ	オリーブ漆黒色土を下層に少量含む。宅地造成のための盛土がされる前の水田耕作土である。
I c	5 Y3/1 オリーブ黒色	シルト質粘土	繊維リーブ色粘土を下層全体に多く含む。耕作がやや深く及び、下層の日曆をまき上げている。	
II	5 Y4/2 漆オリーブ色	粘	土	発生時代の土壌がややグリーン化したような土壌である。
III	2.5Y5/1 黄灰色	粘	上	黑色粘土を下層に複数、酸化鉄を多量に含む。
IV	2.5Y3/1 黑褐色	粘	土	黑色粘土を下層に含む、酸化鉄を多量に含む。
V	2.5Y5/1 黑褐色	粘土質シルト	川元色粘土を上層に一層含み、酸化鉄を多量に含む。	

表5 第108次調査区東壁土層記表



第43図 第108次調査区平・断面図 (1/100)

V 第109次発掘調査

1. 調査経過

第109次調査は、宮城県柴田郡村田町大字菅生字寺前22—6馬場繁氏より、仙台市太白区郡山5丁目11—19において、共同住宅新築計画が提示されたことに伴って実施した。当地点は、昭和45年に現在の共同住宅建築の際、立会調査が行われ布目瓦の破片が発見されたとされている。

調査対象地区は、郡山廣寺の推定方二町寺域の中央部、寺院中枢区画南辺付近にある。周辺では昭和61年度の第63次調査や昭和56年度の第12~15次調査などが行われている。第63次調査では、寺院僧坊建物跡や瓦溜め遺構など、また第12次調査では講堂基壇跡などが発見されている。さらに、昭和24年頃の天地返し耕作時に土中より非常に多くの瓦細片の散布が認められ、郡山遺跡全域の中でも瓦片の散布密度が最も高い地区となっている。

調査は11月27日から12月4日まで実施した。しかし建築される建物の基礎部分のみの調査で、遺構の全容を把握することはできなかった。なお、調査対象地の標高は、9.4m程度である。

2. 発見遺構・出土遺物

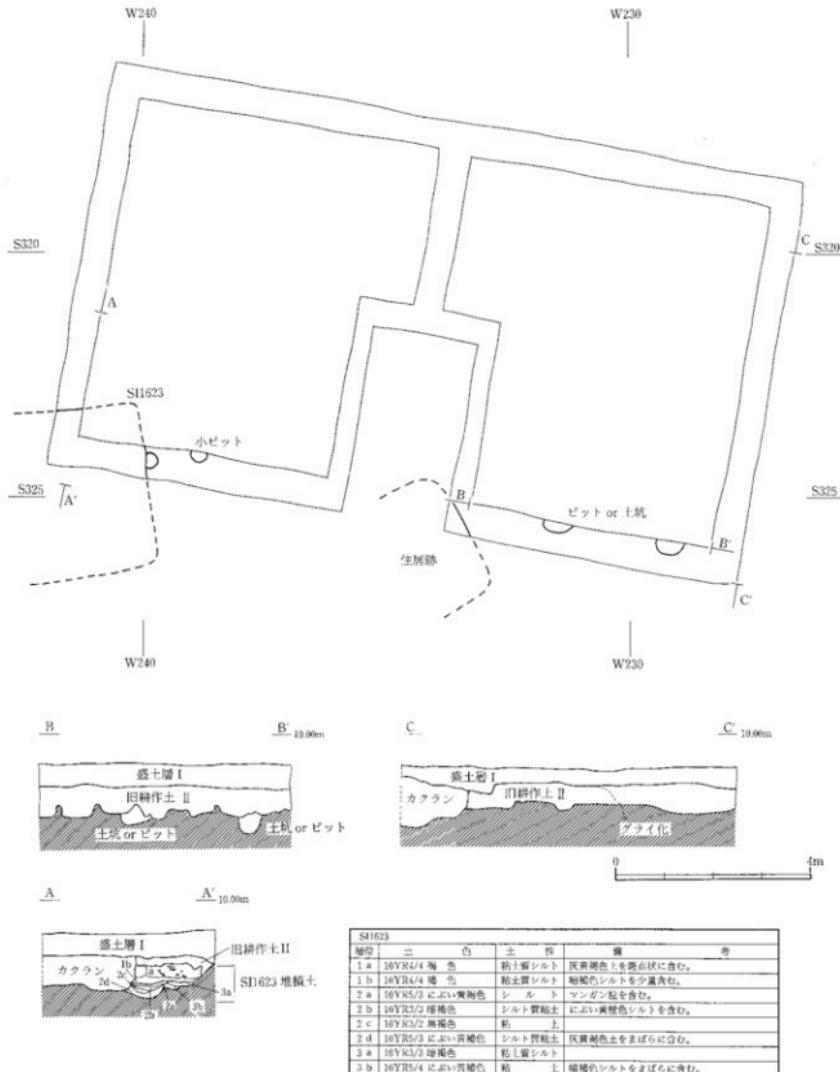
第109次調査では、竪穴住居跡1軒以上、土坑あるいはピット2基の他、小ピット2基を検出した。いずれも遺構の一部のみの検出であるため、詳細は不明である。これらの遺構は、盛土・旧耕作土直下の基本層位第III層上面で検出されている。

SI1623 竪穴住居跡 竪穴住居跡の北辺及び東辺の一部を検出した。方向はN-15°Wであるが、全体規模は不明である。床面までの深さは検出面より40cm程度であり、堆積土は褐色粘土質シルト、暗褐色粘土質シルト、黒褐色粘土などである。遺物は、堆積土第1a層中よりG-72(第46図1・図版31-10)・73(第46図3・図版31-12)・74(第46図2・図版31-11)平瓦、F-77丸瓦(第46図4・図版31-13)の他、平瓦片33点、丸瓦片13点が出土した。

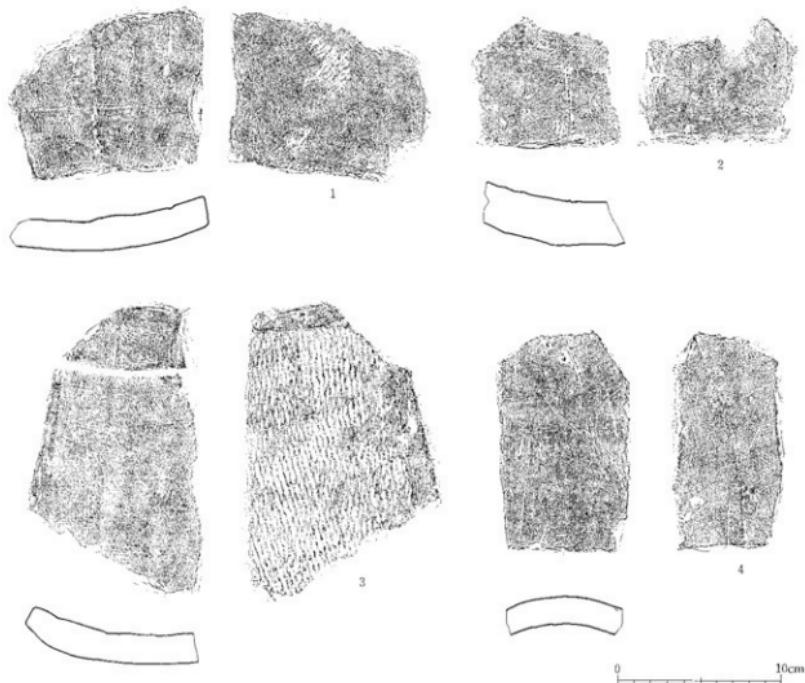
その他、カクラン及び表土中より土師器坏片1点、甕片2点、須恵器甕片1点、丸瓦片10点及び平瓦片16点が出土している。



第44図 第109次調査区位置図



第45図 第109次調査区平・断面図 (1/100)



番号	形状	器形	出土構造	層位	内面		備考	写真同版
					外型調整	内面調整		
1	G-72	平瓦	SI1623	1層	窓クリキ、ナデ	布目痕、横骨痕	縫合き作り	31-10
2	G-74	平瓦	SI1623	1層	ケズリ	布目痕、横骨痕	縫合き作り	31-11
3	G-73	平瓦	SI1623	1層	窓クリキ	布目痕、横骨痕	縫合き作り	31-12
4	F-77	丸瓦	SI1623	1層	ナ デ	布目痕、横骨痕	縫合き作り	31-13

第46図 S I 1623 竪穴住居跡出土遺物

3. まとめ

今回の調査は、調査区が非常に狭小であったため、造構の一部のみの検出にとどまっている。しかし、瓦片が表土中より26点およびSI1623 竪穴住居跡堆積土中より46点出土している。このように多量の瓦片が出土したのは、この地区が郡山廃寺の寺院中枢区画の推定南辺付近に位置していることによるものと考えられる。出土した瓦片は、凹面に布目痕・横骨痕、凸面は窓叩き後ナデやケズリによる器面調整が施されるもので、これまで郡山遺跡で出土している瓦と同じ特徴を有している。

今回の調査では、当初推定した寺院中枢区画の南辺となる遺構は検出されなかった。

VI 総括

今年度の発掘調査は、第4次5ヵ年計画における第1年次目にあたる。第4次5ヵ年計画では、II期官衙の実態を明らかにすることを目的としている。今年度は、政庁の西辺部の遺構の様相を明らかにする目的で第107次調査を実施した。なお年度途中、I期官衙西辺の延長線上付近で共同住宅建築に伴う発掘届が提出されたことから、第108次調査として実施した。さらに郡山廃寺の推定方二町寺域の中央部、寺院中枢区画南辺付近において共同住宅新築計画が提示され、第109次調査として実施している。この他に、国庫補助事業ではないが、市道拡幅工事に伴って第101次調査を実施した。なお第101次調査については、昨年度に引き続き2年次目となっている。

第107次調査では、II期官衙政府域の西辺区画施設の一部と考えられる遺構を検出した。また掘立柱建物跡を多数検出し、建物跡の重複関係から政府内での建物跡の変遷を考える上で重要な手がかりを得ることができた。さらにI期官衙の中枢を構成すると考えられる遺構を検出し、I期官衙の構造を考える上でも貴重な成果が得られた。第108次調査では、I期官衙の西辺に関わる遺構の存在を想定していたが、擾乱が著しく検出されなかつた。また第109次調査でも、郡山廃寺の寺院中枢区画南辺に関わる遺構は検出されなかつた。第101次調査では、II期官衙外郭南辺材木列及び大溝の延長線上にあたる推定位置において、これらの遺構を検出した。第101次調査については、一連の市道拡幅工事に伴う調査が終了後、一括して報告する予定である。

1. II期官衙の調査

(1) II期官衙政府の区画について

これまでII期官衙政府の西辺の区画施設は、第55次調査で検出されたSA730一本柱列であると考えられていた。昨年度、この一本柱列に連続する政府の南辺を区画する遺構の検出を目的に行った第102次調査では、これに相当する遺構は検出されなかつた。そのため、政府の区画施設について再検討する必要が生じていた。今回の第107次調査区は、SA730一本柱列の北側に位置する推定線上にある。しかし今回の調査では、SA730一本柱列は検出されなかつた。よってこれについては第55次調査区と第107次調査区との間で途切れているか、建物跡の一部となる可能性が考えられる。一本柱列の全容については、来年度以降の調査の課題としておきたい。

今回検出したSD1600石組溝跡については、II期官衙推定政府域の西辺付近に位置していることから、政府域の西辺区画施設の一部と考えられる。このような石組の遺構には、第77次調査や第83次調査で検出されたSD1217・1236・1249石組溝跡・SX1235石組池があり、推定政府域内において重要な役割を果たしていたと考えられている。このSD1600石組溝跡がこのまま南に延びたとすれば、第55次調査区はその延長線上に位置している。第55次調査区は、近年の耕作による天地返しが著しく、遺構の残存状況が良好でなかつたことなどから、周辺から礫が多く出土したもの、礫を使用した遺構は検出されなかつた。また、SD1600石組溝が北方に延び、SX1235石組池の給・排水施設と考えられるSD1217・1236石組溝跡と連続していた可能性も考えられる。周辺地区の調査の進展を待って検討していきたい。

(2) 推定政府域周辺の建物跡について

昨年度の第102次調査で、真北方向を基準とする建物跡より新しい真北から西に振れた建物跡を検出した。このことから昨年度の報文において、真北及びやや東偏する建物群から真北より西偏する建物群への変遷を想定した（註13）。今回の第107次調査においても、新たに数棟の重複が確認された。そこでこれまで推定政府域周辺で検出した建物跡を、基準方向によって整理すれば次のようになる。

—A群（真北及びやや東偏する建物群）—		—B群（真北より西に偏する建物群）—	
SB 526 N-3°-E (第44次)	SB 434 E-2°-N (第35次)		
SB 716 E-2°-S (第55次)	SB 435 E-2°-N (第35次)		
SB1210 N-2°-E (第77次)	SB 652 N-4.5°-W (第51次)		
SA1069 E-1°-S (第77次)	SB 638 E-3.5°-N (第51次)		
SB1250 N-1°-E (第83次)	SB 699 E-3°-N (第51次)		
SB 302 E-0°-S (第86次)	SA 730 N-5°-W (第55次)		
SB1465 E-3°-S (第101次)	SB 777 N-3°-W (第55次)		
SB1545 N-0°-S (第107次)	SB 793 E-2°-N (第61次)		
SB1490 E-3°-S (第102次)	SB1485 N-10°-W (第102次)		
SB1555 W-0°-E (第107次)	SB1570 E-6°-N (第107次)		
	SB1560 E-6°-N (第107次)		

今回の第107次調査においても、真北方向のSB1555掘立柱建物跡より新しい真北より西に偏するSB1560・1570掘立柱建物跡が検出された。また、SB1555より新しい建物跡は、SB1565・1575建物跡を含めると4棟あるが、これら全てがB群に属する建物群である。よって昨年度想定したA群→B群（A期→B期）への変遷が今回の調査によつても確認された。ここでは、大きくA群建物で構成されていた時期をII-A期、B群建物で構成されていた時期をII-B期として促えておきたい。

また昨年度の報文では、A群の建物跡の配置について、次のような点を指摘している。SB716建物跡とSB1490建物跡がII期官衙推定中軸線（1）を挟んでほぼ等距離にあり、北桁行の柱筋がほぼ揃っている。またSB1250建物跡（政府正殿）との配置関係も整然としている。SB1465建物跡とSB526建物跡が南北に連なるような配置関係にあり、柱筋がほぼ揃っていることなどである。さらに今年度の調査を含めても、これらII-A期の建物跡は、同位置での建て替えがある場合を除いて、重複関係は認められていない。これらのことからII-A期の建物群は、同じ配置計画の下に整然と配置された可能性が高いと考えられる。

II-B期の建物跡については、II-B期内で重複が認められる点で、II-A期の様相とは異なっている。より詳細な変遷については、今後の調査の中で検討を加えていきたい。

今回、政府域周辺の建物の配置を考える際、II期官衙推定中軸線について検討する必要が生じた。これまでの中軸線（1）は、SB1250（政府正殿）建物跡と外郭南門であるSB712門跡の中心を結んだ線として考えてきた。しかし、整然と配置されたII-A期のSB716建物跡の西梁行とSB1490建物跡の東梁行の中心、SB1250（政府正殿）建物跡の中心を結んで中軸線を求めるとき、（2）の位置となる（第47図参照）。このようにして求めた中軸線は、II期官衙外郭材木列南辺を二分割した中心とも合致するため、II期官衙の建物跡を検討する上で重要な軸線と考えていきた（註14）。



2. I期官衙の調査

第107次調査で発見されたI期官衙の遺構は、調査区の南西部では建物跡が、北東部では板塀などによる遮蔽施設が発見され、各々2ないし3時期の変遷をしていた。調査区の南西部では①SB1595A・B→SB1605へ、北東部では②SA1615・SB1625→SA1620・SB1610へである。南西部と北東部の遺構の変遷がどのような対応関係にあるのかは必ずしも明らかではない。そこで①、②の遺構の在り方をもとにして、これまで実施した周辺の調査区における遺構の様相をまとめると、以下のとおりである。



第2次、第77次調査区では縦柱の建物が2時期あり、その後桁行8間、梁行3間のSB14が建てられている。またSB14に隣接して同規模のSB1100が並んで検出された。さらに第77次調査の南半では板塀跡と建物跡も検出されている。この地点では板塀跡に先行する一本柱列は検出されていない（註15）。

第83次調査区でもSA1245一本柱列とSA1242板塀跡が検出され、重複関係も第107次調査区と同じで、一本柱列の方が古く、板塀の方が新しい。この2列の塀は第77次調査区で検出した板塀の延長線上にある（註16）。

第86次調査区では、第83次調査区で検出したSA1242板塀跡の延長部が検出され、北方からのSA255材木列と交わる箇所でL字に屈曲することが確認されている（註17）。

第51次調査区では調査区の北部でSB655建物跡とSA651板塀跡を検出した。重複関係は建物の方が古く、板塀の方が新しい。なおSB655建物跡は縦柱建物跡と考えられたが、南の桁列だけが抜き取りを受けていたため、この柱列のみで一本柱列となる可能性も指摘していた。今回の第107次調査によって板塀の前段階に一本柱列が存在し、第55次調査区と隣接する位置関係にあるため、SB655は一本柱列と建物に分割される可能性が高い。また南部では縦柱の建物が2時期にわたって重複している（註18）。

これらのことからI期官衙の遺構について他の調査区でも同じような変遷を見いだせる箇所があり、次の2点が指摘されよう。一点は縦柱の倉庫建物から側柱の大型建物への転換であり（※1）、もう一点は一本柱列と建物による区画から板塀と建物による区画への建て替え（※2）である。とくに板塀による区画は長辺で約120m（≒400小

尺)、短辺で約90m(=300小尺)とほぼ完数尺の数値を示し、板塀に掘立柱建物跡が連結するように取り付けている。また所々で板塀が途切れしており、第107次調査の北西端で小規模な門となって途切れ、第51次調査区の中央部でも再び途切れている。このような板塀が途切れている箇所が他に2箇所ある。

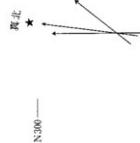
この板塀と建物による区画の内側は、これまでの調査では建物跡など当該期の遺構が発見されず、広く空闊地となっている。このような塀と建物により区画され、中央部に空闊地が形成されるのは、下本谷遺跡(備後国三次郡衙)、長者原遺跡(武蔵国都筑郡衙)、戸島遺跡(因幡國氣多評衛)などの都衙遺跡の都庁院の構造に類似している(註19)。しかしこの板塀と建物に区画された面積を比較すると、これらに比べると著しく違い、ほぼ2倍の面積を有している。区画された中の空闊地は、II期官衙の段階になると正殿や石組池や石組溝が配置される政庁になっている。このことを考えあわせると、この一画は、I期官衙の中でもきわめて重要な機能を担っていたことを窺わせる。建物配置や変遷、機能、所属年代等の詳細については、II期官衙の調査と併せて解明していきたい。

註

- 註1 第83次調査 平成元年度発掘調査概報「郡山遺跡X」
- 註2 第77次調査 昭和63年度発掘調査概報「郡山遺跡IX」
- 註3 土器群D-37環の墨書きについては、東北大文学部教教授今泉龍雄氏より「弓」と判読できる可能性があることを指摘して頂いた。
- 註4 白鳥良一「多賀城跡出土上土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究所『研究紀要VII』1980
- 註5 多賀城市史 第4巻 考古資料「高崎遺跡 升戸尻(今村氏)地区の調査」1991
- 註6 柳澤和明「多賀城周辺における10世紀前後の土器群」 第1回岩手県古代末土器の勉強会資料 1995
- 註7 多賀城跡出土の須恵系土器や本造跡出土の赤焼き土器について、柳澤和明氏より、高台付环はE群土器段階から出土するが、F群土器段階の鴻ノ池地区第7層出土土器群において多くみられるようになることや、その他数々の示唆に富む御教示を頂いた。記して感謝の意を表したい。
- 註8 長島第一・熊谷裕行「仙台市文化財調査報告書第195集「仙台平野の遺跡群 XIV-燕沢遺跡第8次調査など」」1995
- 註9 土岐山武「安久東遺跡」「東北新幹線遺跡調査報告書-IV-」宮城県文化財調査報告書第72集 1980
- 註10 荒井 栄「仙台市文化財調査報告書第148集「鴻ノ池遺跡-第6次発掘調査報告書-」」1991
- 註11 「鴻ノ池遺跡-第6次発掘調査報告書-」の中で、「これらの灰白色の土器が時期的に限定され、器種や器形、法量などに須恵器と違ったまとまりがあるのであれば、須恵器から分離してとらえた方がより適切であると思われる。」ことが指摘されている。
- 註12 小川淳一「仙台市文化財調査報告書第99集「五本松空跡」」1987
この中で土器の内の器面調整等について詳細な分析が行われ、コテなどの工具使用の可能性を指摘している。
- 註13 第102次調査 平成6年度発掘調査概報「郡山遺跡X V」
- 註14 八脚門と想定したII期官衙外郭南門については、全体規模、官衙中軸線との関係も含め、南門地区全域の調査結果を待って検討する必要があろう。
- 註15 第2次調査 昭和55年度発掘調査概報「郡山遺跡I」
第71次調査 昭和62年度発掘調査概報「郡山遺跡III」
第77次調査 昭和63年度発掘調査概報「郡山遺跡IX」
- 註16 註1と同じ
- 註17 第86次調査 平成2年度発掘調査概報「郡山遺跡X I」
- 註18 第51次調査 昭和60年度発掘調査概報「郡山遺跡VI」
- 註19 山中敏史「古代地方官衙遺跡の研究」 塔書房 1994

六

W100



— N300



第48图 1期首部主要遗物配置图 (1/500)

調査成果の普及と関連活動

1. 広報・普及・協力活動

年月日	行事名称	担当職員	主催
7. 9. 13	第107次調査報道発表	長島・熊谷	仙台市教育委員会
9. 15	第107次調査現地説明会	長島・熊谷	仙台市教育委員会
10. 20	遺跡見学	長島	仙台市議員待遇者親和会
11. 19	郡山コミュニティーセンター祭り	長島・熊谷	郡山コミュニティーセンター
12. 9	宮城県内発掘調査成果発表会	長島・熊谷・豊村	宮城県教育委員会
8. 3. 2~3	第22回古代城柵官衙遺跡検討会	木村・長島・熊谷・豊村	
3. 6	遺跡見学	長島・熊谷・豊村	仙台市立西山中学校
3. 14	遺跡見学	長島	仙台市立郡山中学校

2. 主催事業

(1)第23回文化財展 「飛鳥時代の仙台平野」

期間 10月26日(木)~11月8日(水)

会場 仙台市博物館ギャラリー

来場者数 1,887名

展示内容 飛鳥時代の仙台平野の様子を分かりやすく展示し、あわせてパンフレットを無料配布した。

(2)第23回文化財展記念講演会「飛鳥時代と仙台平野」

期日 10月28日(土)

会場 仙台市博物館小ホール

講師 国立歴史民俗博物館 教授 岡田茂弘氏

来場者数 169名

内容 「飛鳥時代と仙台平野」という演題に基づき、同時代における仙台平野と畿内の様子の比較や、スライドによる遺跡の紹介を交えながら、約90分講演していただいた。



第107次調査 現地説明会 (95.9.15)

3. 調査指導委員会の開催

第24回 郡山遺跡調査指導委員会 平成8年2月22日 本庁舎2F第5委員会室

○平成7年度の調査成果について

○平成8年度の調査計画について

○郡山遺跡保存整備計画について

4. 資料の貸し出し・展示

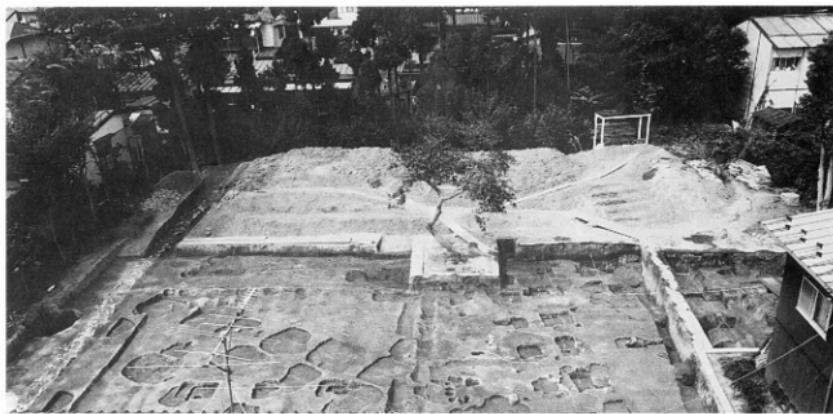
仙台市博物館 常設展 「原始・古代・中世」

東北歴史資料館 企画展 「多賀城」

写 真 図 版



図版1 郡山遺跡航空写真



図版2 107次調査区南半部全景（南より）



図版3 107次調査区南半部東半全景（北より）

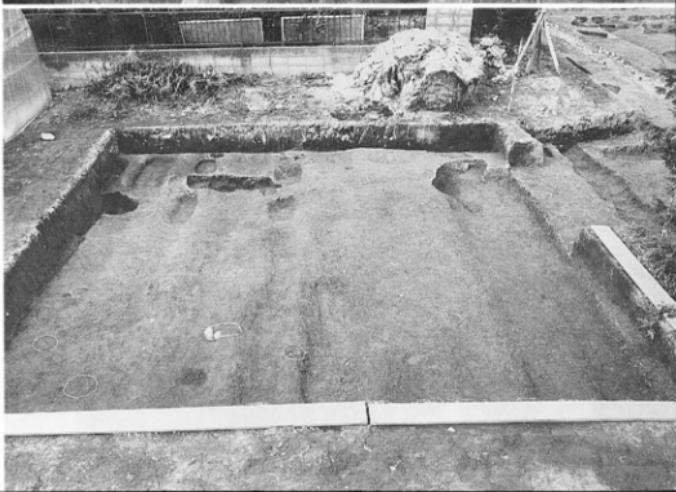
図版 4
107次調査区南半部西半全景
(北より)



図版 5
107次調査区東区全景
(南より)



図版 6
107次調査区西区全景
(南より)





図版 7
107次調査区北半部全景
(南東より)



図版 8
S A 1620板塙跡全景
(南東より)

図版9
S A 1620板塙跡土層断面
(南東より)



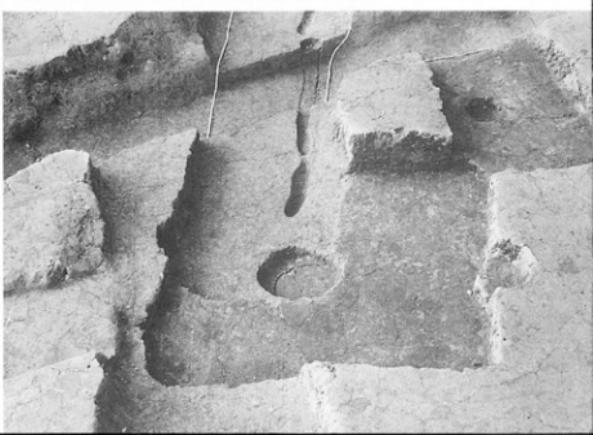
図版10 S A 1620板塙跡土層断面 (南東より)



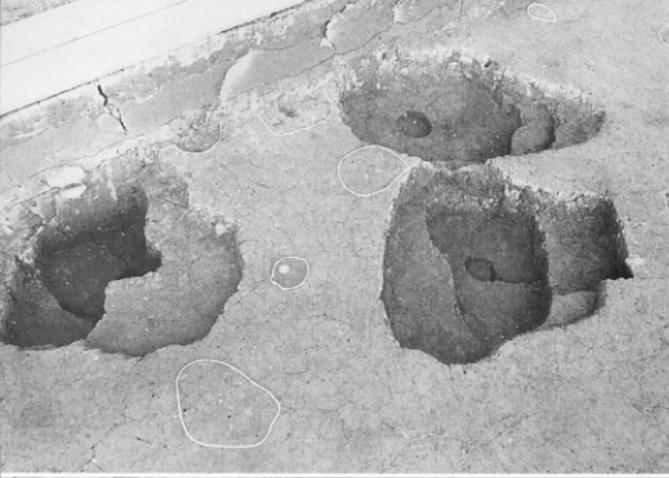
図版11
S A 1620板塙跡板材痕跡
底面白色粘土検出状況
(南東より)



図版12
S A 1620板塙跡
S B 1610N 3 W 1柱穴
接続部 (南東より)



図版13
S B 1645門跡全景
(南西より)



図版14
S B 1545掘立柱建物跡全景
(東より)



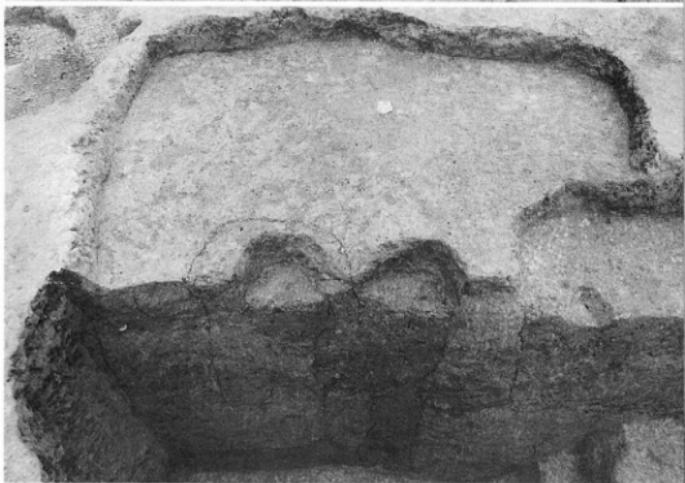
図版15
S B 1555掘立柱建物跡全景
(南より)



図版16
S B 1555 S 1 E 1
抜き取り穴検出状況
(南より)



図版17
S B 1555 S 1 W 3
柱穴土層断面
(西より)



図版18
S B 1560掘立柱建物跡、
S B 1570掘立柱建物跡全景
(北より)



図版19
S D 1600石組溝跡全景
(南より)



図版20 S D 1600石組溝跡底面石敷き (1) (南より)



図版21 S D 1600石組溝跡底面石敷き (2) (南より)



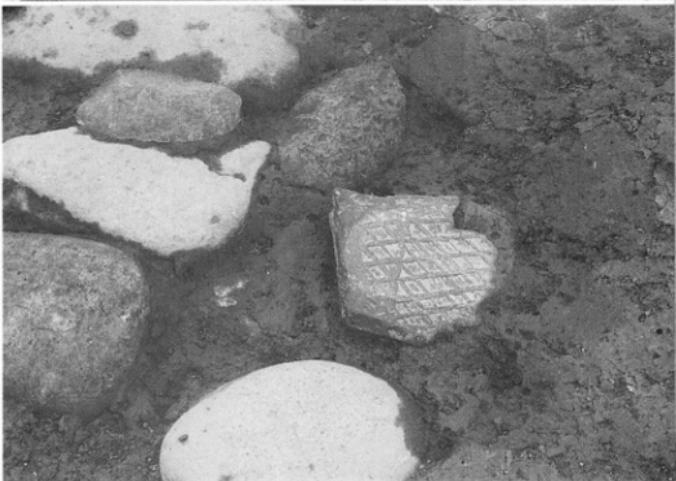
図版22

S D 1600石組溝跡土層断面
(東より)
(石が抜けた痕跡か?)



図版23

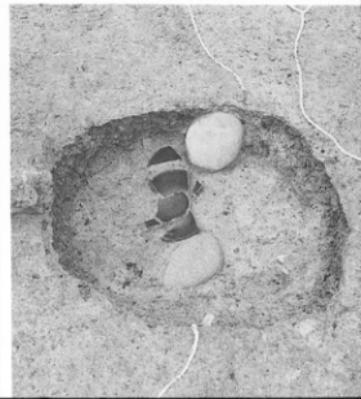
S D 1600石組溝跡遺物出土
状況 G-70 (西より)



図版24 S K 1577土坑遺物出土状況 (南西より)



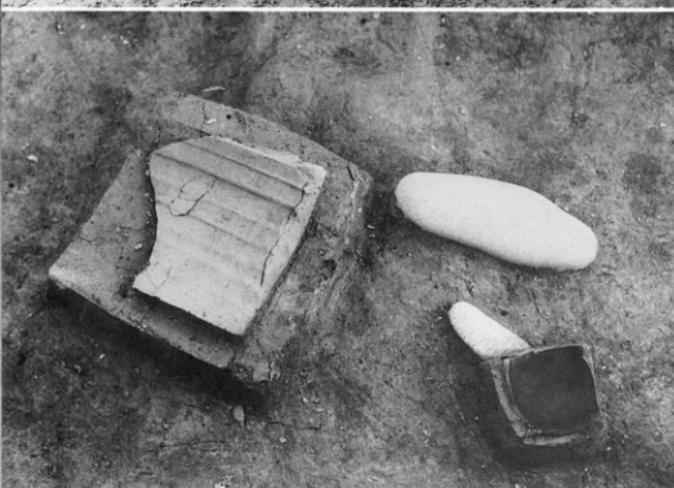
図版25 S K 1578土坑遺物出土状況 (西より)



図版26
S X1616C 高台付皿出土状況
E-377 (北より)

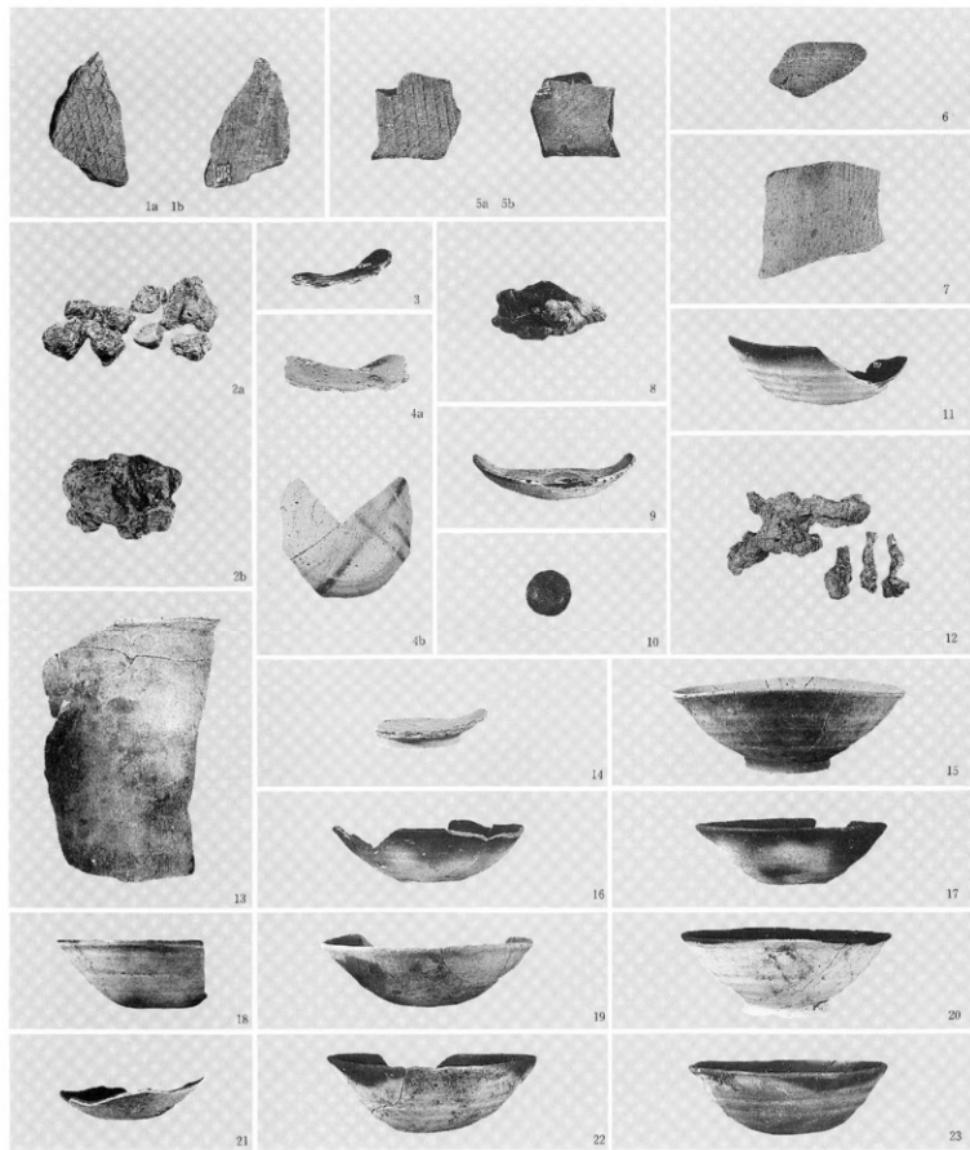


図版27
S X1616C 遺物出土状況、
C-773、G-68 (西より)



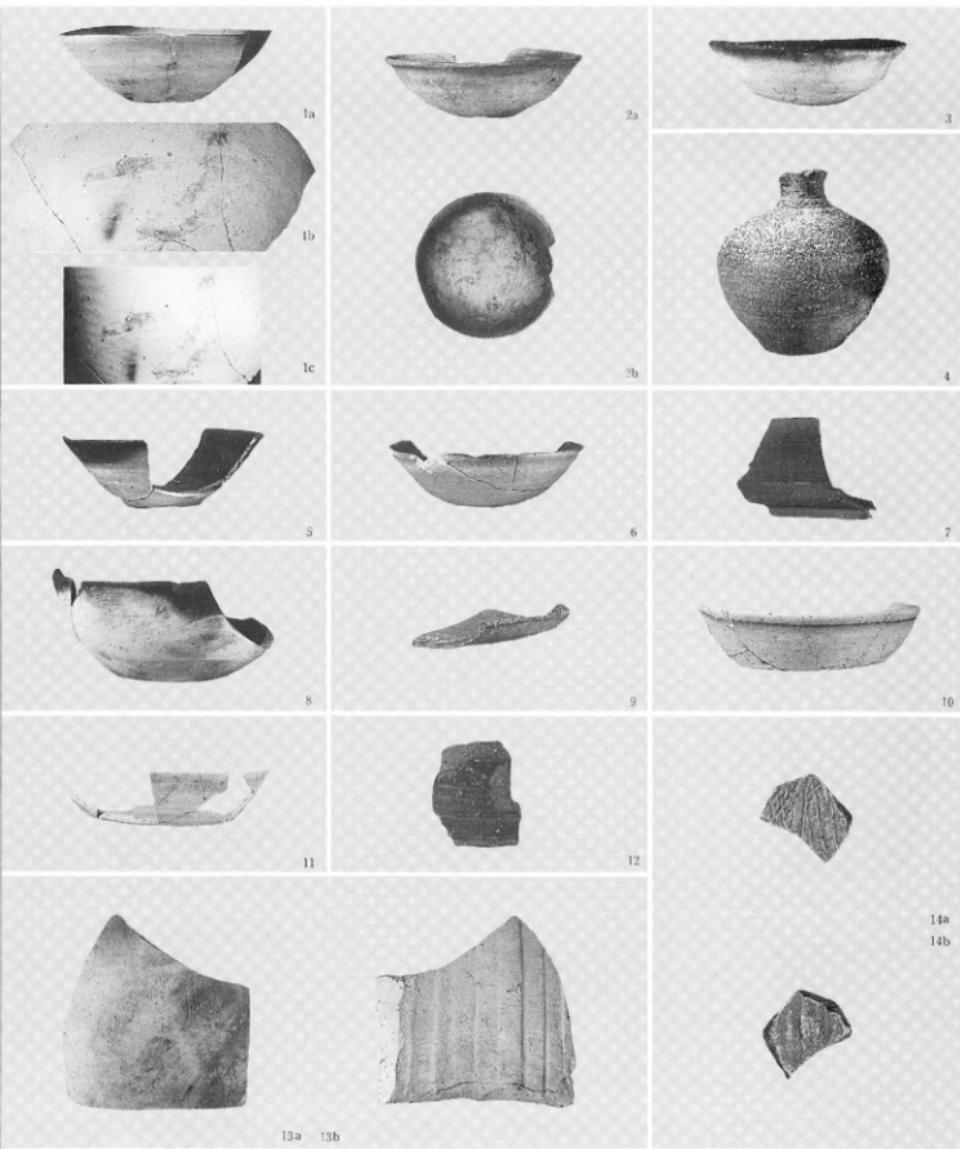
図版28
S D1600、S X1616C
土層断面 (南より)





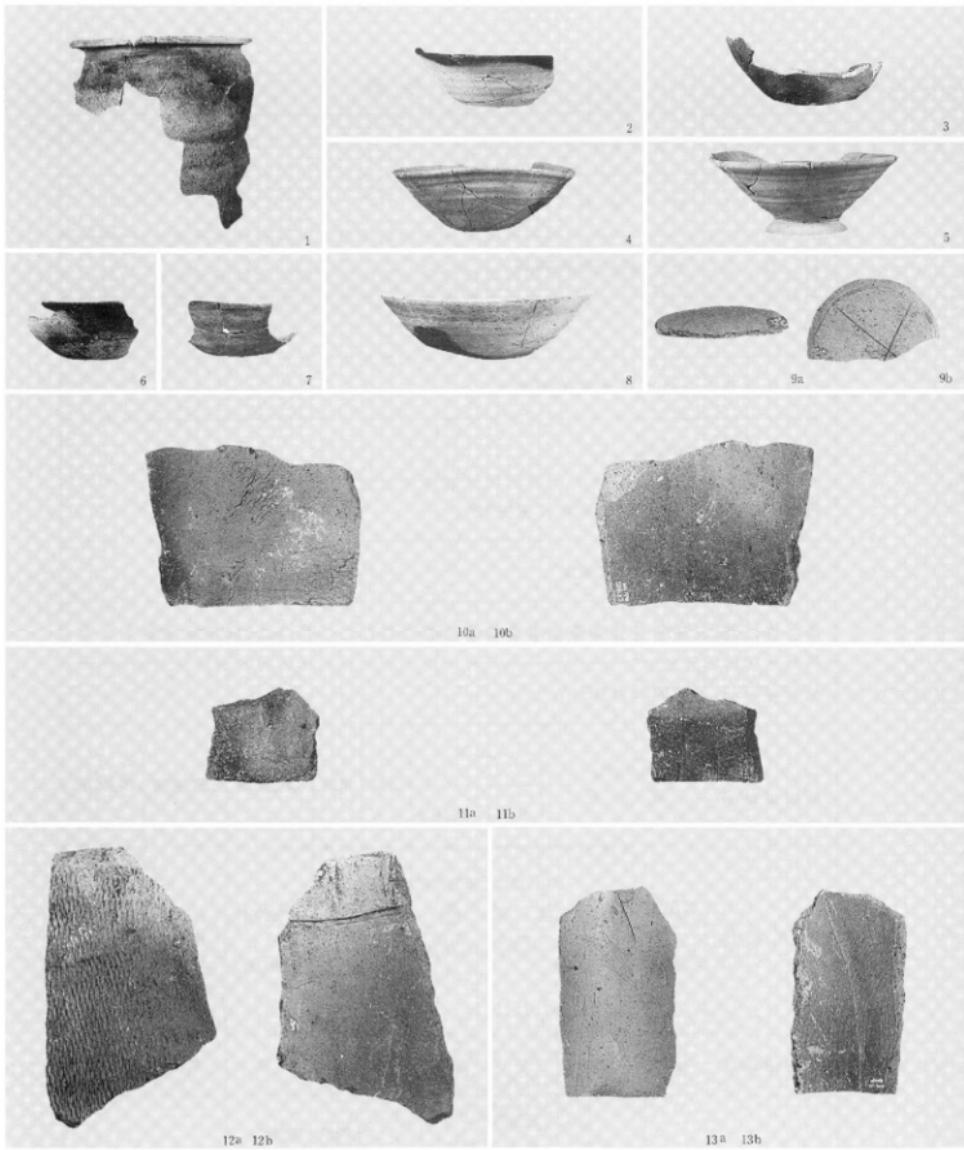
1. G-71 平瓦 S B1555N 1 W 1 9. I-39 三 S D1569 17. D-39 环 S K1577
 2. P-29 スサ入粘土塊 S B1555 10. K-209 石製品 S D1569 18. D-40 环 S K1577
 3. C-776 环 S B1565N 2 W 2 11. D-50 环 S D1592 19. E-387 环 S K1577
 4. E-386 环 S B1570N 6 W 1 12. N-34 銀製品 S D1594 20. D-42 高台付环 S K1577
 5. G-70 平瓦 S D1600 13. D-44 磁 S K1577 21. D-45 环 S K1577
 6. C-775 环 S D1600 14. D-35 高台付环 S K1577 22. D-46 环 S K1577
 7. E-385 磁 S D1600 15. D-38 高台付环 S K1577 23. D-47 环 S K1577
 8. P-28 スサ入粘土塊 S B1575 16. D-36 环 S K1577

图版29 107次出土遺物（1）



1. D-37 环 SK1577 8. C-773 环 SX1616C
 2. D-43 环 SK1577 9. E-377 高台付环 SX1616C
 3. D-48 环 SK1577 10. E-379 环 SX1616C
 4. E-384 長頸壺 SK1577 11. E-378 环 SX1616C
 5. D-28 环 SK1578 12. E-381 円面環 SX1616C
 6. D-29 环 SK1578 13. G-68 平瓦 SX1616C
 7. E-380 高台付环 SX1616B 14. G-69 平瓦 SX1616C

图版30 107次出土遗物（2）



- | | | | |
|----------|------------|----------|-------------|
| 1. D-34 | 甕 表土 | 8. E-383 | 坏 遺構檢出面 |
| 2. D-33 | 坏 表土 | 9. E-382 | 坏 遺構檢出面 |
| 3. C-774 | 甕 遺構檢出面 | -109次- | |
| 4. D-31 | 坏 遺構檢出面 | 10. G-72 | 平瓦 S I 1623 |
| 5. D-32 | 高台付坏 遺構檢出面 | 11. G-74 | 平瓦 S I 1623 |
| 6. D-30 | 坏 遺構檢出面 | 12. G-73 | 平瓦 S I 1623 |
| 7. D-49 | 坏 遺構檢出面 | 13. F-77 | 丸瓦 S I 1623 |

圖版31 107次・109次出土遺物（3）

報告書抄録

ふりがな	こおりやまいせき							
書名	郡山遺跡							
副書名	平成7年度発掘調査既報							
巻次	XVI							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第210集							
編集者名	熊谷裕行、長島榮一、豊村幸宏							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-71 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7-1 TEL 022-214-8893~8894							
発行年月日	1996年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
郡山遺跡	宮城県仙台市 太白区郡山三丁目他	04100	01003	38° 13'	141° 18'	19950619 ~19951204	892m ²	重要遺跡 の範囲 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
郡山遺跡	宮衙跡	古墳 奈良	石組溝跡 掘立柱建物跡 一本柱列・板塀跡 溝跡・土坑 堅穴住居跡	土師器・須恵器 赤焼き土器・瓦 陶器・土製品 石製品・鉄製品				

仙台市文化財調査報告書第210集

郡山遺跡 XM

—平成7年度発掘調査概報—

1996年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町三丁目7-1

文化財課 022(214)8893

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市青葉区立町24-24

TEL 263-1166
